



「明日を共に喜ぶために」

川本教会 高橋虎夫（教団顧問）

収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいたい。

マタイによる福音書 9・37、38

島根県、川本地方では高齢化と少子化が急速に進み、どの家庭でも後継者の問題が深刻です。先祖から受け継いで来た財産（山、田畑）等が、年々荒れてゆくのを目の当たりにしながら、老後を送っておられる姿は、大変淋しく見えます。

諺に「一日を楽しむ人は花をわけよ、一年を楽しむ人は花を育てよ、十年を楽しむ人は木を植えよ、百年を楽しむ人は人を育てよ」とあります。どんな働きや事業でも、最後の決め手は人です。教会も教団にとっても一番大切な事は、信仰と聖霊に満たされた人造りです。その為には多くの時間と犠牲が伴います。

ノアは主の命に従って、一生の大半をかけて箱舟を作りました。救われたのはノアの家族わずか八人だけでしたが、人類絶滅の危機を救う大切な働きでした。私たちも犠牲の大きさを、目先の事で一喜一憂しないで、明日を共に喜ぶために、人造りに全力を注がねばなりません。

初代エルサレム教会は御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを選んで、使徒たちの働きを助けました。又、最初、世界宣教

に用いられたアンテオケ教会は、恵まれた教会でありましたが、エルサレムから聖霊と信仰に満ちたバルナバが加わったことで大いに祝福されました。

伝道の書に「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（12・1）とあります。CSの働きには、多くの祈りと長い時間が掛かりますが、三十年、五十年先を喜ぶ為に、CS伝道に信仰をもって取り組まなくてはなりません。

米国の実業家ジョン・ワナメーカーは、政府から大臣就任の要請を受けましたが、「自分が大臣になったために教会学校の奉仕が出来なくなったら大変だ」と断りました。しかし最終的には「毎週教会学校のご用をする」という条件付で引き受けたということです。

この働きは、クリスチャンである私たちにしか出来ません。しかも時は急がれています。主は、「収穫は多いが、働き人が少ない、だから働き人のために祈れ」と言われました。

教会学校とその働き人のために祈りましょう。祈りは必ず聞かれます。祈りは、あなたが地上に残せる最高にして最大の遺産です。あなたの祈りは細大漏らさず、必ず天に覚えられています。明日を期待して祈りましょう。

牧羊者

目次

巻頭言	1
『牧羊者』使用状況アンケート結果(その2)	3
「牧羊者の用い方」 メッセージ準備のために(その1)	7
キリストとの出会い	9
旧約聖書Ⅱ	15
キリストの誕生	33
牧羊ひろば(峰山教会)	48
おわりに	50

〔凡例〕

1、原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。

2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
「ホーリネス・」「ホ・」……………日本ホーリネス教団
「インマヌエル・」「イン・」……………インマヌエル教会学校部
「日キ・」……………日本キリスト教団出版局

『牧羊者』使用状況アンケート結果（その2）

教会学校局

使用状況アンケート結果、前回は、（その1）として、全体的利用、本誌、ワークについてのご報告をいたしました。今回は、（その2）として、「付録」としてつけられている中高科へのヒント、子ども聖書日課、フラッシュカード、み言葉カードについて、また、カリキュラム、その他についてご報告いたします。

四、「付録」等の利用について

（月刊ベラカ 6月号 p.22 参照）

①中高科へのヒント



【利用者の声】

「中高科の先生に、読んで参考にしてもらっています」

「教会学校のメッセージのヒントとして読み、参考にしています」

「中高生会は出席者がいないが、対象者にはコピーして毎週保護者の週報ボックスに入れて読んで

もらうようにしている」

「中高科を担当していますが、ワークDをした後に中高科へのヒントを用いてディスカッションをしたりしています」

【執筆者からのコメント】



アンケートの範囲では、中高科へのヒントは、あまり使われていないように見受けられました。それは中高生がいない、少ないという理由もあるようですが、もう一つは中高生に用途が限定されているからでもあるように思います。そこで視点を変えて、小学科にも使っていただいてはどうでしょうか。ワークのほうは、閉じた質問（クローズド・クエスション、選択肢から選ぶ質問）が多いですが、中高科へのヒントは、おもに開いた質問（オープン・クエスション、考えさせ話し合うための質問）です。小学生にも使っていたら、生徒のディスカッションが活発になり、分級がより深まると思います。

【CS局より】



帰納法的質問（オープン・クエスションのこと）の制作に熟練し、生徒たちの会話を引き出し、ディスカッションできるような分級になるように、執筆者と共に努力を継続したいと思います。なお、選択肢のない質問は、多くの小学生にとっては難しいと思います。ですから、ハイ・イエエで答えられる質問から始め、最後には会話する質問に導きたいのです。会話する質問は、むしろ、大人の小グループでの学びにも使うことを検討してもよいと思っています。いずれにしても、導く教師の熟練が必要となるでしょう。

②子ども聖書日課



子どもたち全員に渡しているところもあります。が、クリスチャンの親のバックアップを前提に、クリスチャン家庭ごとに渡しているところも多いようです。

【利用者の声】



「子どもたちに配布しています」

「教会学校に通うクリスチャンホームが7家族ほどあり、各家庭に一セット、コピーして渡しています」

「クリスチャンホームの家庭では、子どもと共に家庭礼拝に用いさせて頂いております」（多数）

「両親、母親がクリスチャンである幼・小・中学

生などに渡しています」「毎月まとめて印刷し、子どもたち、子育て中の十人のお母さんたちに渡して、デポジションとして用いています。個人的には家庭礼拝で用いています」

「印刷して、字の読める人（小学生からお年寄りまで）皆に渡しています」

「毎週、一週間分を印刷して、子どもたち、CS教師に配布している。簡潔で良い。子どもたちが毎日読むことを、実生活の中で習慣化できると良い。教師たちの活用努力が必要」

「子どもたちに渡し、親の印で確かめ、その枚数に応じてプレゼントを渡している」

「わかりやすく、良くできていると感心しています」

「聖書個所がノンクリスチャン家庭の子どもにとって、とてもむずかしく、家庭で母親などの励ましが無い場合、継続が困難」

「使用していない。教会で作成した聖書通読のためのシートを利用しているため」

「朝食前に各自で読んで祈るようにしています」「説教準備のために、前もって一週間分を読んでヒントを探します」

【執筆者からのコメント】



家庭礼拝で用いて頂いて感謝！CS教師の方々にもメッセージのヒントのため用いて頂いて感謝！お母さんと子どもと一緒にするケースが多いのかなと思います。以前、中学生が用い

て、お祈りも記してあるので嬉しいという証を読んだ時は、とても励まされました。できるだけ、子どもにピンとくる、わかる、くだけた文と言葉にしたいとは思いますが、急ぐとつい大人調になります。この点、お祈りください。ただ、知識的にも霊的にも、新しいことを学ぶということは大切です。知っていることしか書いてないなら学ぶことにはなりません。特に、学んでほしい霊の知識などについては、「難しいかな？」とも思うこともありますが、「いや、ここでこの言葉が学べることは重要だ」と考えつつ書きます。ノンクリスチャンホームの子ども、この日課を読む習慣がついて救われていくなら、素晴らしいと思います。

【CS局より】



幼い子ども、初心者に対して難しいのは否めませんが、用い方によっては小学生から大人まで用いることができます。子どもデポジション以外に、家庭礼拝や大人のデポジション、メッセージの準備でも使われていること、感謝。一々二分できる復習でもあります。配布方法なども工夫してください。たとえば、縮小印刷（A3→B4）により、B4用紙の裏表に二週間分を印刷して渡すこともできます。

③フラッシュカード

メッセージで視覚教材として用いているところが多数あります。毎回利用している教会もありまし、状況に応じた柔軟な使い方をしているところもあるようです。

【利用者の声】



「メッセージが自由にコピーし、彩色して使っています。とても助かっています」（同趣旨意見多数）

「毎週のメッセージで使用しており、教会員の奉仕の一つとして何人かの方に色をぬってもらっています」

「執筆者が代わると絵が変わるので、子どもたちは『イエス様が違う』と少しとまどうこともあります。しかし、絵の表情などをよく見ていて、話を聞いて『だから笑っているんだね』などと、色々と教えてくれることもあります」

「高学年の子ども好きで用いたりしています」

「大変勝手なことを言わせていただけなら、絵がシンプル過ぎて、どの登場人物が分からないことがあります。そこで、細かい部分にも配慮し、人物の区別ができるようにお願いします」

「お話の助けになりそうな時、色をぬり、拡大コピーして用いています」

「私自身もこのフラッシュカードを見ることにより、準備の段階でとても助かっています」

「OHPシートに印刷し、OHPを用いて画面を大きくして説教に用います。色も塗れて便利です」

「メッセージの時、使う教師と使わない教師がいます」

「時々使用する。例話がびったり来ない場合は使用不可である」

「視覚教材があると子どもたちの反応は良いと感じますが、いつも同じパターンだとマンネリ化してあきられるとも感じています」

「コピーや色塗りに手間がかかるわりに、次回も使えるということはあまりない。よって、別の教材を独自に作っている。できれば、一つの絵がB6くらいだと良い。データ化したものを希望者にメール配信などができれば、自分で加工して利用できるので便利。データの時点で色付きだとお良い」

【執筆者からのコメント】



フラッシュカードを使っていたき感謝です。絵を描く時、研究資料や説教例を読み、「絵を与えて下さい」と祈りつつ描いています。

【CS局より】



メッセージ例に準じた内容にしていますので、メッセージ例から少し離れた自分なりのメッセージをされる時は、部分的に用いるなど、柔軟な使い方をしていただく必要があります。より使いやすいものをめざして、執筆の先生方と共々取り組んでいます。

④み言葉カード

【利用者の声】



「毎週子どもたちに配り、それを用いてみ言葉を覚えるのに用いている」

「色画用紙に印刷して、礼拝メッセージの時に配布している。残部は訪問で届けたり、『かえるクラブ』の子どもと共に暗唱したり、配布している」

「少し厚めの用紙にコピーし、子どもたちに渡しています。当教会では上のほうにパンチ穴をあけ、リングにとじていますが、もう少しそのスペースがあれば、なお感謝です」

「大きさがハッキリしていないので、切りにくいです」

「新改訳で自分でつくります」

【CS局より】



リングで綴じやすいように、2010年度Ⅱ巻より改良しました。

五、カリキュラムについて

(月刊ペラカ 2月号 p.23参照)

①近年のカリキュラムについて

【利用者の声】



「よく工夫されていて面白いと思います」

「段々と充実してきた。利用しやすくなった」

「行事に即して単元が作成してあるので、メッセージ作成にすぐとりかかれて感謝です」

「物語でない箇所ばかり続くと少し難しくなる」

「当教会にはクリスチャンホームの子がいないため、内容が難しいことや、背景がノンクリスチャン家庭の場合は、日常生活への適応が難しい」

「預言書が難しい」

「数週間同じような箇所が続くことがあり、話しにくかった」

「とても難しく、小さな子どもに語るのに苦労しています」

②2010年度のカリキュラムについて

【利用者の声】



『伝道的カリキュラム』『開拓教会学校』のカリキュラムは必要」(同趣旨意見多数あり)

「伝道に主眼をおいてのカリキュラムになった事で、当教会でも用いる事が出来るようになりました」(同趣意見複数あり)

「二つひとつの聖句が有名なところなので、語りやすそうに感じています」

「とてもわかりやすく、よくまとめられていると思います。感謝。特に『目標』が子どもたちの受け取るべきものが明白で素晴らしいと思いました」

「テーマが『キリストとの出会い』というのは、とても大切な事なので、良いと思います」

「私たちの教会はクリスチャンホームの子どもたちで、長く来ているので、三年間サイクルのほうがいいかと思いました」

「伝道説教を意識してカリキュラムを作った、とお聞きしていたのですが、例えば八月一、八、十五日の『神は〇〇である』シリーズなど、すこし教理くさいカリキュラムではないかな…と思いました」

「できるだけ福音書を取り上げ、書簡は少なくしてほしい。抽象的な概念より、具体的なストーリーを中心に」

「三年間を通して同じような内容のくり返しとなっている気がする。もっと違う聖書箇所があってもいい」

「暗唱聖句が長い時があると年齢が低いため覚えるまでには至らない」

「年間カリキュラムの文字がつまりすぎて、視力の弱い者には大変読みづらいので、二枚になってもわかりやすい印刷にして頂ければ感謝です」

【CS局より】



今回は、伝道的カリキュラムという趣旨で作成しましたが、それと共に、暗唱聖句をも重視しま

した。生涯に残りうる暗唱聖句ができるだけ入るように、聖書箇所や範囲の選択も工夫しました。そういう中、いろいろな観点からの要請をすべて兼ね備えたカリキュラムの作成には、限界もあることを今回感じました。そうではあってもなお、教会学校の現場に即した、有用なカリキュラムを用意できるよう、今後も努めてまいりたいと願っています。お祈りください。

文字の大きさにつきましては、申し訳ありませんが、各自で拡大コピーしていただけますでしょうか。

六、その他

【利用者の声】



「幼稚科へのメッセージ例を復活させて頂きたい」「イースターエッグや、母の日のプレゼントなど、子どもたちと一緒に作って楽しめる作品を紹介して下さると嬉しいです。（毎年悩みますので、参考に）」

「工作、ゲーム（分級にふさわしいもの）がもっと知りたい。紹介して頂けたらと思います」

「メッセージ例のページをまとめて頂くと見やすいと思います」

【CS局より】



幼稚科へのメッセージ例につきましては、現在、ワークAの解説の中に、「話し方のヒント」というものがあります。ひと口に「幼稚科」と言っても、年齢や状況により様々ですが、参考にしてください。

七、『牧羊者』を用いていない理由

今回のアンケートで、『牧羊者』を用いていないという教会は四教会でした。理由として、三教会は定期的な教会学校活動が行われていないとのこと。一教会は、現在のCS対象者に合わせて独自教材を作成し、メッセージしているとのことでした。教団の教会で『牧羊者』を購読していない教会は、現在、約三十教会。その他の教会で用いていない理由についても、ぜひ教えて頂けたらと思います。

【CS局より】



『牧羊者』がより良いものになるためには、利用者、執筆者、CS局が、一致協力してチームとして前進することが必要です。今後も、共に苦勞しつつ進みましょう。

牧羊者の用い方

ーメッセージ準備のために ー

教会学校局

『牧羊者』を用いて、どのようにCSメッセージの準備をしたらよいのか、今回と次回、二回に分け、解説致します(ワークその他を用いて、分級をどのように進めるかについては、また別の機会に致します)。

今回の解説にあたっては、初心者マーク付きのCS教師の皆さんにも分かりやすいように、具体的な形を提示することを願いました。

そのため、第一に、仮に「一週間で準備をする」としたら」という想定で、準備の具体的なステップを紹介することにしました。レイアウトも、一日分を一ページとして、見やすい形を考えました(土・日のみ合わせて一ページ)。もちろん、実際には、このとおりにはいかないと思いますし、もっと違った順序で準備を進めたほうがよい場合もあると思います。一つのサンプルケースとして、参考にして頂ければと思います。

第二には、更に具体的になるように、第一巻のカリキュラムの中から、四月四日の分を取り上げて、「例えばこんな風に…」というものを紹介するようにしました(各ページ下部の囲み部分)。

準備を始めるにあたって

① 準備の大切さ

『牧羊者』は教「案」誌です。記載のメッセージ例をそのまま読み上げたら、それでよいのではありません。『牧羊者』片手に講壇に立つCS教師もあると伺いますが、ぜひそのようにしないで頂きたいと願います。

教会学校の始まる直前、『牧羊者』のページを必死にめくるのも、ぜひ避けて頂きたいものです。社会人として、主婦として、学生として、忙しい中であって、メッセージ準備のための十分な時間を割くことは、大変な努力を要することではあります。しかし、メッセージのご奉仕は、「神のみ言葉」を預かり、これを子どもたちの心に届けていくこうとするものです。その責任の重さを覚え、最低、メッセージ準備は、前日までに済ませておくことを大原則として頂きたいと思います。

② 準備の前の準備

具体的な準備に入る以前に、メッセンジャーとして子どもたちの前に立つための霊的な備えが必

要でしょう。み言葉を語るにふさわしく、聖別された生き方ができているかどうか、点検しましょう。説教者として子どもたちの前に立つ、その前に、私たち自身が神様の御前に立つ…これがメッセージを語るための基本です。

③ 準備の開始

具体的な準備の開始は、早いほど良いでしょう。できれば、前の週の日曜日か、月曜日から、少しずつ取り組めればベストです。説教の奉仕者が交替でメッセージする場合は、もっと早くから準備を始めることも可能でしょう(今回は、月曜日から始めることを想定して、解説いたします)。

《例えばこんな風に…》

2010年度カリキュラムより
4月4日(カリキュラム番号1)

テーマ	復活による勝利
聖書	マタイ28・1～10
暗唱聖句	マタイ28・7
	「イエスは死人の中からよみがえられた。」
目標	キリストの復活による勝利を経験する者となる。

月曜日 ― 聖書に聞く

① 聖書箇所を何度も読む

メッセージする聖書箇所を読むことが、第一です。『牧羊者』の文章を読む前に、まずご自分で聖書箇所を何度か繰り返し読んでお読みください。

み言葉のメッセージは、メッセンジャーの人格を通して語られます。借り物では、子どもたちの心に届きません。CS教師である皆さんが、み言葉から直接受け取ったメッセージを子どもたちにお伝えすること、これが基本です。「神様、この箇所をおして、何を教えてくださいますか」と、御声を聞こうとする心をもって、何度も読みましょう。

但し、カリキュラムとしての方向性を押さえておくことは大切です。一度、聖書箇所を読んだら、次には、カリキュラムとしてのテーマや目標を把握した上で、再度、聖書箇所を読むのも良いかと思えます。

② 聖書箇所から教えられたことを書き留める

聖書箇所を繰り返し読んで読みながら、教えられたこと、子どもたちに伝えたいと感じたこと等、書き出してみよう。この時点では、まとまりのないものでも結構ですが、最低、次のようなポイントを押さえておきましょう。

・聖書箇所の全体的な流れや経緯、状況等を確認

する（観察）。

・聖書箇所から教えられることを確認する。これがメッセージの種になっていきます（意味）。

・適用については、もつと後の段階に回してもよいのですが、心に浮かんだものがあればメモしておきましょう（適用）。

③ 聖書講解も参考に

この段階で『牧羊者』の聖書講解を読むことも良いでしょう。聖書講解をおして、聖書本文の中に込められた神様からのメッセージを、より深く味わうことができるでしょう。

④ 研究資料なども参考に

この段階で、ある程度、聖書研究が必要になる場合もあります。なじみのない聖書箇所、全体としてどんな神様からのメッセージがあるのか、つかみにくい場合などがあるからです。

聖書研究のためには、『牧羊者』の研究資料がまず助けになります。更に学びを深めたいときのために、注解書、聖書辞典、聖書地図など、参考書をひと揃い用意しておきましょう。ただ、この段階では、あまり細かい部分に立ち入るよりも、聖書箇所を通して神様が何を語ってくださったているか、その点に絞って学ぶようにしましょう。

《例えばこんな風に・・・》

- 〔観察〕 聖書の流れ ①キリスト復活の日、女性たちが墓を訪れた（1節）。
②天使が現れ、女性たちにキリスト復活の知らせをした（2～7節）。
③女性たちが墓を立ち去る途中、復活のキリストが現れた（8～9節）。
- 注意点！ ・女性たち、十字架の場面にも登場。（イエス様に対する思いが強かった）
・天使は地震、石の移動と共に現れる。（→女性たち、怖かったでしょう）
・天使もイエス様も、「恐れることはない」と。（女性たち、恐れや戸惑い大きい）
・天使、「墓は空」と「イエス様の復活」とを、セットで知らせる。
・天使もイエス様も、「弟子たちに、ガリラヤへ行くよう伝えよ」と。
・天使の知らせを受けた女性たち、「恐れながらも大喜びで」（8節）
- 〔意味〕 教えられたこと ・イエス様の復活は、恐れに満ちた人に喜びを与える。
・復活の「事実」が、人を作り変える。
・イエス様の復活を知った者には、それを人に伝える使命が与えられる。

聖書 ヨハネ4・1～19

テーマ 尽きない喜び

序論

(鎌野善)

先週から「キリストとの出会い」との単元のもとで学びを進めている。先週のニコデモとは対照的に、今週扱う一人の女性は地位も低く、旧約聖書の知識もない、一般庶民である。しかも、ユダヤ人が蔑視していたサマリヤ民族だったが、主イエスはご自分からこの女に近づかれた。それは、罪の中を歩んでいた彼女に、〈永遠の命に至る水〉を与えるためであった。尽きない喜びを与えてくれるこの水は、以下のようなものである。

一、だれにでも与えられる

ヨハネのみが記す初期ユダヤ伝道を終えて、主は再びガリラヤに戻ろうとされた。地理的には、エルサレムからそのまま北に進めばガリラヤに行けるのだが、その場合は〈サマリヤを通過〉しなければならぬ。多くのユダヤ人はそれが嫌で、ヨルダン川沿いの遠回りの道を選んでいった。しかし、主があえてその道を通られたのは、この女性に会うためであったことは明白である。ユダヤ人の知識階級に属していたニコデモに必要であった〈永遠の命〉は、サマリヤ人の庶民階級の女にも必要であった。

永遠の命は、民族、階級、性別の違いに関係なく、すべての人に必要である。神はそれを与えたいと願っておられるのだ。しかし、昔も今も、多くの人々はそれを知らず、求めようとしぬい。

二、求める者に与えられる

〈時は昼の十二時ごろであった〉。乾燥地帯の真つ昼間は最も暑い時である。そんな時間に水をくみに来るのは、人と出会うのをはばかる場合であることは、容易に推測できる。だが主はあえてこの女性に〈水を飲ませて下さい〉と言われた。ユダヤ人の男性から声をかけられることなど一度もなかったこの女性が驚いたのも無理はない。

なぜ主はこのようなことをされたのか。それは、この女性に自分の必要を自覚させるためであった。18節でわかるように、彼女は過去に五人の夫があったが彼らと離別し、しかも現在の夫は、正式な夫ではなかった。この時代にそのようなことをする女性は、社会からつまはじきされていたことは確かであろう。その女性に〈永遠の命〉を求める崇高な思いはなかったが、毎日水をくみに来る重労働から解放してくれるというなら、話は別である。だから彼女は最後に、〈主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい〉と言った。

ニコデモの場合と同様、主はこの女性とも対話された。そして、自分に何が欠けているかを自覚させ、それを求めさせられたのである。「求めよ、そうすれば、与えられる」とは、昔も今も共通する基本原則であることを忘れてはならない。

三、主イエスによって与えられる

しかしそこに至るまでには、かなりの時間がかかった。彼女は、「くむ物がないのにどうやって?」「あなたは祖先のヤコブよりも偉いのか?」と質問

している。この間に、主は〈この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう〉と答えられた。主は、目に見える水ではなく、永遠の命という水について語られたのだ。それは、主イエスしか与えることのできない水である。しかも、その水を飲む者は自分が泉のようになって、他の人々にも水を与えることができるという。何とすばらしいことか。

永遠の命とは、単に死んでから後の命というのではない。それは、地上で生きている時にも、その人からわきあがる喜びの泉である。25節以降には、不道德な生活をしていたこの女性の生活態度が、主イエスと出会うことによつて一変したことが記されている。人の目を避けるのではなく、自ら進んで人々に、主イエスが「キリストと呼ばれるメシヤ」であることを伝えたのだ。彼女の中に喜びの泉がわきあがったことは否定できない。

結論

キリストに出会ったとき、私たちは喜びあふれる生涯へと変えられる。新しい命、永遠の命が与えられるからである。それは人種性別を問わず、おとんでも子どもでも、だれにでも与えられる。ただし、求めようとしぬいならば与えられない。私たちは、「その水を私にください」という求めをおこさせるように語り、行動していこう。宣教はそこから始まっていくのだから。

研究資料

(宮澤)

ご存知のように、この物語は42節まで続く。まず備えに当たっては、42節までお読みいただくことが求められる。その上で、この物語の主題は、イエスの伝道によって一人のサマリヤの女性が救われ、そのことによってサマリヤ人たちが救いへと導かれていったことにある。42節のサマリヤ人の告白が全教会学校になされることを期待したい。

テキスト

4 しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった イエスがガリラヤへ急いで赴いたことを示している。「ふなければならぬ」(キ)デイ

は、ヨハネにおいては神により与えられた道を言い表している。神の必然とでもいうべき言葉である。イエスがここで神から受けた使命を成就するために、決然として進んで行かれた様子を描いている。また、ユダヤからガリラヤへのルートは、サマリヤ経由が最短距離でもあった。

5 スカル ヤコブの井戸の北東約一キロメートルのところに、現在のアスカル村と同定されている。またシケム(ヨシユア20・7)のギリシヤ語訛であるという説もある。

6 旅の疲れを覚えて ここに主イエスの人間としての姿があらわれる。主は私たちと同じ肉の体を持ち、罪以外は人間としての状態をことごとくとおられた(ピリピ2・6〜11)。時は昼の十二時ごろであった 直訳は「第六時」(新改訳)。口語訳は、ユダヤ的な時刻の呼び方(夕方の六時

から朝の六時、朝の六時から夕方の六時)に従って、「第六時」を「昼の十二時」と訳している。

7 イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」といわれた ライルはこの主イエスの素朴な求めに以下の四つの注目すべき点を挙げる。①罪人への霊的な働きかけ ②驚くほど謙遜な行動 ③思慮と分別に富む行動 ④気転に富む行動。

9 ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである ヨハネによる挿入句。サマリヤがアッシリヤに滅ぼされ、サマリヤ以外の地域からサマリヤに移住させた外国人と結婚(雑婚)し、ユダヤ人としての純粋性を失ったことから、両者の反目が起こった。

10 神の賜物 この箇所には様々な解釈がある。①聖霊。特別な神の賜物をさす。②キリストご自身。それこそが罪の世界への神の最大の賜物である。③慈悲深さ、恵みという賜物。ある英訳聖書では、この賜物を「generosity」(寛容、気前のよさ)と訳している。しかし、文脈から考えると、その次に登場する「永遠の命に至る水」(14)を指すこともできる。生ける水 永遠の命に至る水をさす。また神に対する人間の霊的な渇きを根源的にいやす「いのちの水」のことでもある。

11 前節の主の言葉に対して、この女性は「生ける水」のことを「わき出る水」としか理解していなかったであろう。それが「生ける水」の普通の意味であった。

から朝の六時、朝の六時から夕方の六時)に従って、「第六時」を「昼の十二時」と訳している。

7 イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」といわれた ライルはこの主イエスの素朴な求めに以下の四つの注目すべき点を挙げる。①罪人への霊的な働きかけ ②驚くほど謙遜な行動 ③思慮と分別に富む行動 ④気転に富む行動。

9 ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである ヨハネによる挿入句。サマリヤがアッシリヤに滅ぼされ、サマリヤ以外の地域からサマリヤに移住させた外国人と結婚(雑婚)し、ユダヤ人としての純粋性を失ったことから、両者の反目が起こった。

10 神の賜物 この箇所には様々な解釈がある。①聖霊。特別な神の賜物をさす。②キリストご自身。それこそが罪の世界への神の最大の賜物である。③慈悲深さ、恵みという賜物。ある英訳聖書では、この賜物を「generosity」(寛容、気前のよさ)と訳している。しかし、文脈から考えると、その次に登場する「永遠の命に至る水」(14)を指すこともできる。生ける水 永遠の命に至る水をさす。また神に対する人間の霊的な渇きを根源的にいやす「いのちの水」のことでもある。

11 前節の主の言葉に対して、この女性は「生ける水」のことを「わき出る水」としか理解していなかったであろう。それが「生ける水」の普通の意味であった。

13 この水を飲む者はだれでも、またかわくであらう 前節までの女性の言葉には直接答えていない点に注目する必要がある。主は、彼女の心を、自らが与えようとする「永遠の命の水」へと導こうとされる。その手始めとして、ヤコブの井戸からの水は、たとえ喉を潤したとしても、また喉が渇くものであることを指摘される。

14 わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう ヤコブの井戸の水に対して、主が与える水は①内面的なものであり、②その人のうちで源泉となるものであり、③永遠の命に至らせる水である。このことは、イエスの使命について、またイエスが何者であるかについて、明確に宣言している箇所である。

16 18 この箇所から新しい展開にはいる。イエスは自らの真相を明らかにするが、女はまだイエスが与えようとする水の真の意味はわからずにいる。しかし、この水を真に与えられたいと願うならば、自らの真相を知ることと罪の悔い改めは、避けて通ることができない。この女は自らの苦勞を感じ、また自らの欠乏を感じたに違いない。しかし、自らの罪を感じるには至っていない。

19 主よ、わたしはあなたを預言者と見ます 彼女がイエスを「預言者」と認めたことは、注目される出来事である。「あなた(がた)はわたしをだれと言うか(マタイ16・15)とあるように、まずイエスの本性を幼子たちにわからせることが重要である。

参考図書 ジョン・C・ライル『ライル福音書講解 ヨハネ1』(聖書図書刊行会)、ピ・エフ・バックストン『ヨハネ傳講義』(バックストン記念靈交会)他

聖書	ヨハネ4・1～19
タイトル	喜びいつぱいの心
暗唱聖句	わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない
目標	ヨハネ4・14 キリストにある喜びの生涯を生きる。

導入

(飯田勝)

今、皆さんが夢中になっている遊びは何？それをしてる時は、もちろん楽しいし、喜びいつぱいでしょう！でも、その喜び、ずっと続くかなあ。皆さんは、どんな時でも喜んでいたいと思うでしょう。どうしたら、嫌なことや悲しいことがあっても喜んでいえることができるんだろう。その秘訣を知りたいよね。

心が渴いていたサマリヤの女

ユダヤの北に、サマリヤという地域がありました。ある時、イエス様がそこに来られました。「あゝ疲れた。ここで少し休もう」とイエス様は、目の前にあった井戸の側に座って休まれたのです。それは、ちょうど昼の十二時ごろでした。するとそこに一人の女性が井戸の水を汲みに来たのです。普通、水汲みは朝にする女性の仕事でした。朝になると井戸は、多くの人で賑わいました。そこで女性たちは「私の家の牛に子どもが生まれたの」とか、「〇〇さん結婚するって聞いたけど本当なの!?」と、井戸端会議が行われていたのです。

でも、イエス様の前に現れた女性は違いました。彼女は人が多く集まらない時間をねらって水を汲

みに来ていたのです。皆さんは「今日は、誰にも会いたくないし、話したくない」と思ったことがない？この女性は、そうでした。それは、彼女が大変不幸な結婚生活を繰り返していたからでした。それで彼女は、他の人の目を避けて生きていたのです。彼女はどんな気持ちで過ごしていたのでしょうか。皆さんは分かりますか？

彼女の体は井戸の水で、毎日の必要を満たすことが出来たでしょう。でも、彼女の心の必要を満たすことは出来なかったのです。彼女の心には喜びがなく、渴いていたのです。皆さんの心は、今、どのような状態ですか。この女性のように渴いていませんか？

「生ける水」を与えるイエス様

イエス様は、この女性に「水を飲ませて下さい」と話しかけられました。当時、ユダヤ人とサマリヤ人は付き合いをしていませんでした。でも、イエス様はそのようなことは構いなしに、女性に近づいて行かれたのです。

皆さんはクラスの中で、嫌がられている友だちに話しかけていますか？「あいつと話すと自分も仲間はずれにされる」と、みんなと一緒に無視してない？イエス様はどのような人であってもし親しく声をかけてくださる方なのです。

イエス様は、この女性と会った時、彼女には何が必要なのか分かりました。それは「生ける水」でした。イエス様は、「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と言われました。

イエス様が与えてくださる「生ける水」とは、イエス様にある真の喜びです。そしてこの喜びは、決してなくならないのです。イエス様は、私たちに失われない真の喜びを与えてくださいます。

「生ける水」を求めるサマリヤの女

この女性はいつまでも、渴くことのない水について聞きました。するとこの女性は、その話を聞いたただけでしようか。いいえ、「主よ、わたしがかわくことなく、また、ここにくみにこなくともよいように、その水をわたしに下さい」とその水をイエス様に求めたのです。

たとえば、皆さんがマクドナルドに行ったとします。そのメニューには美味しそうな物がたくさんありますね。でも、店に行っただけではハンバーガーを食べることは出来ません。「ビックマックセットをください」と自分の欲しい物を、注文しないと食べることは出来ません。

イエス様は皆さんの心に、失われない喜び、あふれ出る喜びを与えてくださいます。そして、その喜びは変わることがないのです！それをサマリヤの女性のように「私にそれをください」と求めますか？イエス様は求める者に、その喜びを与えてくださるのです。

まとめ

イエス様がくださる喜びの水が心に満ちるなら、皆さんの顔は輝きます。そして、それが家族や友だちにあふれ流れて、周りの人々を幸せにして行くのです。ぜひ、イエス様を信じて、喜びにあふれさせて頂きましょう。

♪歌い続けよう主の愛を♪

(ホーリネス・子どもさんびか77)



聖書 ルカ19・1〜10 テーマ キリストとの出会い

序論

(水川)

ニコデモやサマリヤの女と同様に、キリストとの出会いが、魂の回心に至った物語です。キリストは、いつも変わらぬお方です。ここでのザアカイになされた事を、主は私たちのうちにも行うことを望んでおられます。

一、ザアカイという人

主がエリコの町に入られた時のことです。エリコは世界最古の城郭都市でエルサレムに近く、門のすぐ側には収税所があります。ザアカイは取税人のかしらで、しかも金持ちであつたのです。当時のユダヤ人は取税人を嫌い、犯罪人扱いにしていました。そのうえ、高額のを徴収し、上前をはね、金持ちになつた取税人のかしらであれば、市民の対応は良いはずがありません(3)。しかし、ザアカイは取税人レビ(マタイ)が救われ(5・27)、十二弟子の一人に選ばれた事を知っていたのでしよう。強い好奇心を持ってイエスにお会いしたいと願っていました。彼がなぜ取税人になつたのかは不明ですが、ザアカイとは、「清い、清い」という意味の名前です。幼い時から「清い、清い」と呼ばれてきた経験は、彼の潜在意識に焼き付けられ、主を求める心を呼び覚ましたのでしよう。

二、お出会いくださるキリスト

木陰に身を隠し、のぞき見るザアカイに対して、主の方から「ザアカイよ、急いで下りてきなさい」と語りかけてくださいました。ザアカイはこの時

まで主を知らなかったのに、主は彼のすべてを知っていてくださいました。ザアカイだけでなく、私たちに對してもすべてを知っていてくださり、最高の配慮をしてくださるのです。前もつての打ち合わせもなく、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とは、唐突なお言葉に思えます。それは、木に登つてまでも主にお会いしたいと願うザアカイの思いを知つての、主の応答です。主は、切実に求める者の思いを知つてくださるお方です。彼は社会的な地位も、富も手にしている社会的成功者の一人でした。しかし、人々からは罪人呼ばわりされる中で、心の中には満足できない寂しさがあつたに違いありません。

大金持ちの役人は、永遠の命を求めて来たのに、富にこだわつてキリストに従いきれず、悲しみながら去つて行きました(18・18〜27)。その時、主は「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう」と言われました。人々が「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、主は「人にはできない事も、神にはできる」と言われました。この時の主の答えが、ここに表わされているのです。(失われたものを尋ね出して救う) 御業の実現です。

三、全く変えられたザアカイ

主を喜んで迎え入れた(6)ザアカイは、全く変えられました。自分の財産の半分を貧民に施すと誓つたのです。大金持ちの役人にはできなかった事を、ザアカイは自主的に申し出ました。富に對して至上の魅力を持っていた彼であつたのに、更に不正な取り立てについては、四倍につづなうと言

うのです。主イエスにお会いした事によつて、彼は本当に変えられました。彼は全く新しい人間に作り変えられ、新しい生き方をする者となつたのです。ザアカイは、それから取税人のかしらとしての仕事を続け、資産家であつたと伝承にあります。状況は同じでしたが、その中で彼は新しい者として、新しい生き方を貫いたのです。主に出会つて頂いた恵みは、その後の彼の生涯を支え続けたのです。

主イエスは、今日も信ずる者のうちに同じことをしてくださるのです。K子さんは、教会学校の問題児でした。隣近所の人たちも彼女が来ると物がなくなると言つて玄関に鍵をかけるのです。彼女が中二の時、夏のバイブルキャンプに参加しました。メッセージを聞くうちに、涙を流して罪を悔い改め、キリストを受け入れました。その日からK子さんは全く変えられました。教会学校には一番早く来て、先生の手伝いをし、一番前の座席に座つてメッセージを聞きます。公園伝道にも参加して、集まつた子どもたちの世話をするようになりました。近所の人たちが、「教会はすごい。あの子を全く変えてしまったのだから」と言うようになって、教会に来る人も起こされるようになったのです。

結論

ザアカイが変えられた時、イエスは「きょう、救がこの家に来た」と言われました。キリストとの出会いは、ザアカイを変えただけでなく、家族や周囲の人々に祝福をもたらしました。生徒たちが真にキリストと出会えるように、教師であるあなたが、まずキリストの御前に出て、奉仕に励もうではありませんか。

研究資料

(宮澤)

三つの主の目にわたって取り上げられてきた「キリストとの出会い」という單元も、今日が最後であり、そのクライマックスとも言えるザアカイと主イエスとの出会いが、取り上げられる。

この物語は、ルカのみが記している物語である。では、なぜルカはこの物語を、この箇所に書いたのであろうか。実はルカは、18・18〜30において、金持ちの議員の譬えを記している。その際「それでは、だれが救われることができるのですか」(18・26)という、人々の疑問を聞いた。その結論として、救われたザアカイの物語を挿入したと見る考がある。また、ルカの描くイエスの到来の目的である「弱い者への福音(救い)」(ルカ4・18)の典型的な例として、書いたのではないとも考えられる。

テキスト

1 エリコ 死海に注ぐヨルダン川の河口から北西約十六キロメートルに位置し、対岸のヨルダン方面からの交通の要衝であった。ローマ時代に関税所があった。ここでの徴税人は、ローマ政府より関税徴収を請け負っていた。

2 ザアカイ 「きよい人」「義しい人」といった意味の名前。彼の特徴を聖書からいくつか書き記しておく。

①彼は取税人のかしらであった(2)。エリコの町は地理的な交通の要衝であつたうえに、ローマにとつても重要な地であり、この町の取税人のかしら、すなわち税務署長であつたであろうザアカイは、莫大な財をなしていたと推測される。

②彼は背が低かつた(3)。

③彼の名は、聖書中ではこの箇所のみであるが、彼はその後、カイザリヤの司教(監督)になつたとされている。

4 いちじく桑 果実はいちじくのように、葉は桑のような木。特徴として、枝が低いところから広がっていることがあげられる。従つて、ザアカイは容易に登ることができた。

5 ザアカイよ イエスはザアカイの名を知つておられた。しかも、その主導権はイエスのほうにあった。イエスご自身からザアカイの名を呼ばれたのである。きょう ルカによる福音書は、この言葉を単なる時間的な意味での「きょう」として用いるのではなく、救いが時間の中にやつてきたという驚くべき真実と、目の前の出来事が誰のためのものかを示す意味で、非常に重要な意味を持つている言葉として用いている。あなたの家に泊まることにしているから 直訳は「泊まらねばならない」という非常に強い断定的な表現。ザアカイの救いのためにそうせねばならない、という神の定め、神の聖旨の表れ。

6 急いで、よろこんで ザアカイの心弾む喜びの表現を的確に描いている。

7 人々 泥棒と同じような取税人のかしらであるザアカイの家に泊まるなどということは、ザアカイから常日頃だまされている住民たちにとっては信じられないことであつたに違いない。しかし、イエスは「罪人の仲間」(7・34)なのである。

8 立つて(ギヒステミ) この語は第一義的には(ある場所に)立つこと、あるいは立つという姿勢を指す言葉と理解されるが、「定める」「決心する」という意味もあわせ持つ言葉である。彼の語つた次の決意の言葉と絡めると、イエスとの出会

合いが彼を決心させた、と見ることもできる。

主よ、わたしは誓つて…… 律法によれば、賠償は、自発的な弁償の場合は、損害額に四分の一を加えた額を弁償し、また盗品がもとのままで返された場合は二倍、また意識的な強盗の場合は四倍から五倍の弁償を求めていた。ザアカイの申し出は、この律法の要求以上の弁償であつて、ザアカイの悔い改めの実である。罪人の家に立ち寄り、温かい交わりをもつてくださるイエスの愛は、自らの罪を自覚させ、悔い改めへと至らせるのである。

9 きょう、救がこの家にきた 5節参照。特にこの文では、救いが「家」に來たことに注目したい。ルカにおいて、救いはしばしば個人ではなく「家」に來る。ザアカイに家族がいたのかは分らないが、一人の人の救いは、ルカにとつてはその家全体の救いにつながることであろう。

アブラハムの子 ルカにとつて、アブラハムの子であるということは、ユダヤ人であるという事実以外に、神の救いの計画に基づくアブラハムの子という意味がある。このアブラハムの子を何によつて判定するか、ということに関しては、ユダヤ教とキリスト教の長い対立の歴史がある。ユダヤ教ではそれを血統と割礼とに見てきた。しかし、キリスト教では、この問いはアブラハムと同じ信仰とわざとに見る。人の子 は、この隠れたユダヤ人を探し出して救うために來られたのである。

10 今回の中心聖句であり、またイエスの使命の本質を指すこの言葉は、ルカにおいてはたびたび登場する(5・32)。そして、失われた者たちにイエスが引き起こされるのは「悔い改め」なのである。

参考図書 加藤常昭編訳『説教黙想集成2』「福音書(教文館) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句ルカ19・1〜10
新しくされる出会い人の子がきたのは、失われたものを
尋ね出して救うためである。

目 標

ルカ19・10
キリストと出会い、キリストを
心にお迎えする。

導入

(飯田勝)

今、皆さんの一番の仲よしの友だちのことを心に
思ってみてください。その友だちのことを思う
と、いろいろな楽しいことが浮かんで来るでしょ
う。そして、「あ、〇〇さんと出会えて本当に良
かったなあ」と思いませんか？これから皆さん
には、たくさんのお会いがあるでしょう。その一
つ一つの出会いを大切にしてくださいね。その中
でもどうしても出会って欲しい人がいます。誰だ
と思いますか？そう、イエス様です！ 皆さんは、
イエス様にもう出会っているでしょうか？

あなたを知っておられるイエス様

エリコという町にザアカイという人がいました。
彼の仕事は「取税人」と言って税金を取る仕事で
した。皆さんは百均に行ったことがあるでしょう。
百円の物を買ったとレジで百五円支払います。その
五円が税金です。これはきちんと決められている
ことです。でも、当時の取税人たちは、自分が得
をするように、決まっているよりも多くの税金を、
人々から取り取っていました。また、仕事の都合
で、ユダヤ人に嫌われていた異邦人とも関わりが
ありました。ですから、取税人はユダヤ人から罪

人と見られ、嫌われていたのです。ですからザア
カイも、町の嫌われ者だったのです。

ある時、町にイエス様が来られました。町中の
人がイエス様を一目見ようと集まっていた。す
て、ザアカイもイエス様を見ようとした。でも、
彼は背が低く、しかもたくさんの人に隠れて見
ることができませんでした。でも、彼はあきらめ
ず、木に登ってイエス様を見たのです。

するとイエス様がザアカイを見上げて「ザアカ
イ、急いで降りて来なさい。今日はあなたの家に
泊まることにしている」と言われたのです。ザア
カイにとつて、イエス様とは初めての出会いでし
た。それなのに、イエス様はザアカイのことを知
っておられたのです。不思議ですね。

イエス様は今日、あなたの名前を呼ばれます。
イエス様はあなたの名前だけではなく、あなたの
ことをすべて知っておられるのです。

あなたの友となられるイエス様

イエス様は、みんなから嫌われているザアカイ
の家に入られました。当時、ユダヤ人たちは罪人
と言われるような人と付き合ってはいいませんで
した。周りの人はイエス様に「彼は罪人のザアカ
イの家にはいつて客となった」と非難したのです。
でも、イエス様は、ザアカイの家に入り、彼の
友だちになってくださったのです。その時、ザア
カイの気持ちはどうだったでしょう。みんなから
嫌われ、ずっと寂しかったザアカイは、すごく嬉
しかったに違いありません。

今日、イエス様は「あなたの友だちになりたい」
と言われるのです。

あなたを救ってくださるキリスト

ザアカイにとつて、家にお客さんが来るなんて
久しぶりだったかも知れません。彼は、できる限
りのもてなしをしたでしょう。そして、イエス様
といろいろな話をするのができたでしょう。す
ると突然、ザアカイは立ち上がりました。そして
イエス様を「主よ」と呼びました。これは彼がイ
エス様を救い主として心に迎えた瞬間でした。ザ
アカイは、イエス様こそ自分の罪を赦し、寂しさ
を慰めてくださるお方だと信じたのです。

その時からザアカイは変えられました。イエス
様に「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を
貧民に施します。また、もしだれから不正な取
り立てをしていましたら、それを四倍にして返し
ます」と言い出したのです。

ザアカイはイエス様と出会うまでは、自分に得
になることばかりを考えていました。でも彼は人
から奪う者から、人に与える者になりました。
イエス様に会って心が変えられたのです。また、
自分の罪を悔い改めました。ザアカイの心は、以
前とは違う新しい人にされたのです。

まとめ

イエス様は、ザアカイのような罪人を救うため
に来られました。そして、イエス様はあなたの心
も新しくしたいと願っておられます。そのために、
「わたしをあなたの心に迎えてくれないか」と言
われるのです。あなたはどうしますか？イエス様
を心に迎えてこそ「イエス様に会った」ことにな
るのです。あなたはイエス様と出会い、心新し
くされたのですか？

(ホーリネス・子どもさんびか87)



聖書 出エジプト14・10～25 テーマ 困難における救い

序論

(金井信)

約束の地を目指して、イスラエルの民はエジプトを出発しました。しかし早速に大きな試練が襲いかかってきました。イスラエルの人々がエジプトを去ることを許したはずのパロが考えを変えて、エジプトの軍勢に後を追わせましたのです。

主はイスラエルの民に、信仰の道を踏み出す時に、必ず戦いが起こることと、戦いを恐れるのではなく、主に従って、主がなされる勝利を見ることを教えようとされました。イスラエルの民は、それまでのモーセとパロの戦いにおいて、傍観者でした。しかし、ここでは自分の戦いとして取り組み、勝利を味わうことによつて、心から主を賛美し、また救いの御業を諸国に証しする神の民の使命を自覚していく者とされたのです。

一、恐れに対する勝利

「意気揚々と」(8) エジプトを出たイスラエルの民ですが、この元気は自分たちの身についたものではありませんでした。後を追って来るエジプトの軍勢の姿を遠くに見ただけで、今度はたちまち「非常に恐れた」のは、まだ信仰の戦いに当事者となることがないからです。

主は愛する子を育てるために訓練として試練を通らせます。「恐れてはならない。かたく立て」とモーセは命じます。かつてモーセも恐れに

支配されていましたが、主に導かれる中で、恐れに勝利してきました。ここでも、イスラエルの民が恐れを抱くことを理解しつつ、恐れを捨てて主のみ言葉に立つことを命じています。

主イエスも、たびたび弟子たちに「恐れるな」と語りかけられます。敵の数が多い、波が高いと言いつつは様々立ちますが、自分の心の中にある恐れこそが、第一の敵なのです。あれこれ不平を言うことをやめて「黙して」主の救いを待つことが勝利への出発点です。

二、敵の前の守り

主はモーセに命じて、「つえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中の乾いた地を行かせ」られました。もし主が望まれるならば、ただちに天から火を送つてエジプトの軍勢を滅ぼすこともできました。しかし主はひとまず、敵をそのまま残しました。その意味の一つは、これまで民の先頭に立っていた神の使いと雲の柱が、うしろに回ったことに表れています。つまり、敵との間に主ご自身が壁となつて民を守られたことです。

詩篇23篇5節にも「あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる」とあります。敵が減びることを私たちは求めますが、主の答えは時に、敵がなくなるのではなく、敵があつても私たちが平安と希望に生きることに導かれることがあります。

主イエスも「わたしがお願いするのは、彼ら(弟

子たち)を世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守つて下さることであります」(ヨハネ17・15)と祈られました。

敵があつても、また自分に敵に勝つ力がなくても、恐れることはありません。むしろ敵の存在を通して主の圧倒的な勝利を見、主への賛美に導かれるのです。また敵の口を通して、主の真実が証しされるのです。

三、主が勝利を取られる

自分の内にある恐れを捨てて、主の言葉に従い、海の中の道に足を踏み入れた者、前進した者だけが、主の勝利を見ることができました。

二度と彼ら(エジプトびと)を見ないであろう」と主が示されたのは、文字どおりにエジプトびとの姿を見ないということではありません。これから世の力を恐れたり惑わされたりしないで、ただ主を仰ぎ見る信仰に引き上げられるということです。

イスラエルの民は最初、エジプトの軍勢を見て恐れましたが、最後に見たのは「主があなたがたのために戦われる」ことであり、「主がエジプトびとに行われた大いなるみわざ」(31)でした。「私が」ではなく「主が」と、人生の節々で主語が移っているかどうか、自分の足跡を考えさせられます。

結論

信仰の生涯に踏み出すとき、必ず戦いが起こってきます。その時に自分には力も知恵もなく恐れだけがあることを認め、平安と希望を与えて救いの道を開き導かれる主に、信頼して従いましょう。

研究資料

(宮澤)

この箇所は、1節からはじまる「出エジプト」の物語のクライマックスとも言える箇所である。それまで十の奇跡をつぶさに見、体験してきたイスラエルの民でありながら、目の前のエジプト軍を恐れ、どこから救われたのかさえ忘れてしまう。しかしそのような中でも、神はエジプト全軍を破って自らの栄光を現される（誉れを得る）のである（25）。その目的は、イスラエルの神が全地の主であることを、全世界に知らせるためである。

テキスト

11 モーセに言った イスラエルの民は、助けを求めて、まず主に向かつて叫ぶ（10）。しかし、彼らがその後、すぐにしたこととは、目に見えるモーセに向かって叫んだことである。この行為はしばしばイスラエルの民がしたことであった（16・3他）。非常に人間的な姿をここに見るのである。目に見える現実の出来事によって、霊的状況が左右される人間の姿をここに見出すことができる。

13 恐れてはならない この言葉は通常、顕現の際に神によって語られる言葉である（創世記26・24他）。もしくは嘆きの中にある人々に対して語られる言葉である（哀歌3・55・60）。モーセは神の代言者としてイスラエルの民に語るのである。**かく立つて** 新共同訳では「落ち着いて」と訳されている。かく立つとは、戦いのために肩肘張ることではなく、神が先立って彼らのために行われる救いを見るために、身構えることなのである。**救い** ここでは文字どおりのちを救うことであり、エジプト人からの救出のことである。

14 主があなたがたのために戦われる この言葉は、申命記の中に繰り返し登場する言葉である（申命記1・30、3・22、20・4）。しかし、主が私たちのために戦われるためには、この後の命令である「私たちが黙すること」が求められる。**あなたがたは黙していなさい** 民に、主への信頼を促す言葉である。決して身動きもゆるさないような意味ではなく、あるいは受け身になるようにという意味でもない。信仰生活の大切な要素であり、主の前に静まり、耐え忍んで主を待ち望むことは、私たちの信仰生活に必須のことである（詩篇37、46参照）。

15 主がモーセに言われた、とあるが、イスラエル全体に対してこのメッセージを発したという考え方もできる。また民の代表であるモーセに対して語ったこととらえることもできる。いずれにしてもここでの神の中心メッセージはイスラエルの民を進み行かせることであった。

18 わたしがパロとその戦車とその騎兵とを打ち破って誉れを得るとき この一連の奇跡の中心であり、目的でもある。出エジプトとは、主の栄光の表れであり、同時に民にとつては救いと贖いの出来事でもある。

19 この海での出来事の主役は神であり、神の使である。神の使 この神の使は、具体的には雲の柱として登場する。この雲の柱がイスラエルの民とエジプト人の間に立つことによって、イスラエルの民とパロの軍勢とは分けられたのである（20）。**雲の柱 火の柱**（24）とともに、神の臨在の象徴として登場する。

20 雲と闇があり夜もすがら 少しわかりにくい言葉となっているが、直訳は「そこに雲があり、

暗闇があつて夜を照した」となる。つまり、この柱はエジプト人には夜（暗闇）をもたらししたが、イスラエルにとつては彼らの中で光であつたのである。ここでは、イスラエルに必要なのは、導きではなく助けであった。

21・22 イスラエル史で最も劇的であり、かつ最も重要な場面の一つである。モーセが手を海の上にさし伸べたので この奇跡が偶然の出来事ではなく、ご自分の民を救われる主の力強い御業であつたことの証明である。神は、人間という媒体を通して働かれる神なのである。**東風** 恐らく強風の代名詞であろう（10・13）。また超自然的な「風」と解釈する見方もある。さて、主がどのような方法でこの奇跡をなさつたかについては、渡渉地点の議論とも絡んで数多くの議論がある。ここでは詳述は省くが、超自然的な、神のご介入であると同時に、神は自然現象をも用いることができるのである。

24 暁の更 「朝の見張りのころ」（新改訳、新共同訳）。午前二時から夜明けの六時ころ。この夜明け前の最も暗い時間帯は、人々がまだ眠りの中にあり、奇襲するには最も良い時間帯とされていた。**乱し** 主がどのようにしてエジプトびとの軍勢を乱されたかは書かれていないが、乱すとは、「混乱させる、パニック状態にさせる」というような意味である。

25 戦車の輪をきしらせて 「戦車の車輪をはずし」（新改訳、新共同訳）。ヘブル語本文は「取り外す」。砂や泥地は、軽装備のイスラエル人にとっては容易に進軍できたであろうが、重装備の戦車にとつては、車輪がとられてしまう結果になつたのであろう。

参考図書 R・アラン・コール『ティンデル聖書注解』「出エジプト記」（いのちのことば社）他

聖書
タイトル
暗唱聖句

出エジプト14・10～25

道を開かれる神様

かたく立って、主がきょう、あ

なたがたのためになされる救を

見なさい 出エジプト14・13

困難の中でも道を開いてくださ

る神を信じる。

目
標

導入

(飯田勝)

今、皆さんにとって「嫌だなあ」と思っていることがありますか。嫌なことって考えたくないです。でも、考えたくないものほど、いつも頭から離れないものです。「算数や読書感想文の宿題やらなくちゃ。あ〜どうしよう。やらないと先生に怒られる〜」。でも、もし皆さんの友だちの誰かが「宿題一緒にやろうよ!」なんて声を掛けてくれたら「助かった!、ありがとう!」って気持ちになるでしょう。神様は友だち以上に、皆さんのことを思い、助けてくださる方なのです。

迫ってくる困難

皆さんは、ピラミッドを知っていると思います。それはどこにあるでしょうか?そう、エジプトですね。今から数千年前、イスラエルの人々はエジプトに住んでいました。でも、彼らは奴隷として毎日、苦しい仕事をさせられていたのです。

神様は、そのイスラエルの人々を救うために素晴らしいリーダーを選びました。それがモーセです。モーセはイスラエルの人々を励まし、エジプトから脱出させたのです。

イスラエルの人々は奴隷から解放されました。そしてそれを心から喜びました。その後、彼らは神様が約束された土地を目指して進んで行ったのです。しかし、パロの強力な戦車隊が後を追って来ました。イスラエルの人々は逃げようと思っても前は海です。戦車隊はぐんぐんと後ろから迫ってきます。皆さんならどんな気持ちになるでしょうか。戦車隊が迫ってくるという経験はしないかも知れません。でも、嫌なこと、苦しいこと、悲しいことが、戦車隊のように迫ってくることはあるでしょう。そんな時、皆さんならどうしますか。ただじっと我慢するだけですか。

神様に信頼しよう

イスラエルの人々は、モーセに「どうして、エジプトから脱出させたのですか。こんなことならエジプトの奴隷だった方が良かった」と言ったのです。脱出した喜びが、嘆きが変わってしまったのです。モーセも彼らと同じ戦車隊を見ました。でも、モーセは違いました。彼は落ち着いてイスラエルの人々に言いました。「かたく立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救いを見なさい」と。そして続けて「主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」と言ったのです。皆さんなら、こんな時どうしますか。戦いますか、それとも逃げますか。黙って何もしないなんて出来ますか。モーセは、「主が必ず救ってくださる」と、神様に信頼したので、困難な時、イスラエルの人々は嘆きました。でも、モーセは神様に信頼しました。皆さんは、どちら

ですか。モーセのように、まったく神様に信頼する者にさせて頂きましょう。

救ってくださる神様

神様はモーセに語られました。「海に杖を差し伸べ、海を分けなさい。そして、海の中をイスラエルの人々を通らせなさい。エジプト軍が追って海の中に入るが、私がそれを打ち破る」と言われたのです。これを聞いたモーセはどう思ったでしょうか。「そんなこと無理だ」と思ったでしょうか。いいえ、モーセは神様の言葉を信じてそれを実践したのです。すると「ゴオオー!」と強い風が吹き始めました。何と、海が分かれました。そして、海の中に道があらわれたのです。モーセはイスラエルの人々を連れ、その道を渡り始めました。しかし、戦車隊はイスラエルを追ってきます。イスラエル全員は海を渡りました。その時、神様はモーセを通して海の水をもとに戻されたのです。追って来ていた戦車隊はみな、海の中に沈んでしまいました。神様は、迫ってくる困難の中でイスラエルの人々に道を開き、約束どおり救われたのです。イスラエルの人々は、神様の救いを見ることが出来たのです。

まとめ

皆さんにも嫌なことや悲しいことがあるでしょう。でも嘆いてばかりでは、ますます苦しくなるばかりです。是非、神様を信じ、信頼してください。イスラエルの人々に救いの道を開かれた神様は、必ず皆さんをも救ってくださいます。

♪ただひとり♪ (ホーリネス・子どもさんびか92)



聖書 ヨシユア1・1～9 テーマ 信仰による前進

序論

(金井信)

ヨシユア記は、主の導きのもとにイスラエルの民をエジプトから連れ出したモーセの後を継いで、ヨシユアがカナンの地に民を導き入れる物語です。

ヨシユアが後継者となってリーダーシップを発揮しますが、ヨシユアを選ばれたのは主であり、約束の地を与えてくださったのも主の御業です。主の戦いと勝利を確信して、前進していく信仰をこの書を通して学ぶことができます。

一、しもベヨシユア

ヨシユアは、かつてのカナン偵察の際には、敵を恐れないで信仰に立ち、前進を進言しました(民数記14・7～9)。また、モーセが自分の後を継ぐ指導者を主に求めたときには、「神の霊のやどっている」(民数記27・18)者だと、主のお墨付きをいただき、すでに任命されていました。

そのヨシユアは、「モーセの従者と呼ばれています。偉大な指導者の亡き後、どのように民を導けばいいのか、恐れと不安を感じていたことを思わせます。しかし、ここから主は直接にヨシユアに語りかけられます。

これまでヨシユアは「主のしもベモーセ」の「従者」で間接的でしたが、ここからは直接に主の僕となっていくきます。これまでモーセの姿を間近に見続け、モーセを通して聞く主の言葉に従ってきた、これこそが主の求めるしもべでした。

聖書には「あなたの父と母を敬え」(出エジプト20・12)、「主に仕えるように、快く仕えなさい」(エペソ6・7)など、まず謙遜に人に仕えることを通して、主のみこころに従う備えができてくるとを教えています。恐れや不安をしずめ、打ち勝たせてくださる主の言葉は、へりくだる者の心に語りかけられます。

二、わたしが与える地

聖書が繰り返して記しているのは、約束の地はイスラエルの民が自分たちの意思や力によって勝ち取ったものではなく、「主が与えられたということ」です。これを忘れると、聖戦思想や、今日のパレスチナ問題において誤った理解をしてしまいます。主がカナンの国々を滅ぼされたのは、その人々が主の「忌みきらわれる」(申命記7・25)神々の彫像を拝み、「主の声に従わない」(申命記8・20)からであり、「悪い」(新共同訳 神に逆らう)「(申命記9・4～5)民だったからです。ですから、もしイスラエルの民が約束の地に入ってから、同じような過ちを犯したら、「あなたがたも滅びる」(申命記8・20)と警告されています。

私たちが開拓精神をもって伝道に励むことができるのも、主が先立って戦ってくださるからであり、すでに十字架の勝利によって得られた「わたしが与える地に行きなさい。ゆきめぐりなさい」と命じられているからです。「この町には、わたしの民が大ぜいいる」(使徒18・10)という約束を信じて証のわざに励みましよう。

三、恐れるな

主はヨシユアを「強く、また雄々しくあれ」と励まされます。これは、ヨシユアの内にも力があるから「がんばれ」と言われているのではありませぬ。主ご自身が、力強い御手をもってみわざをなさるので、あなたは臆病になるなと繰り返されているのです。

使徒パウロは、愛弟子テモテを「神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」(Ⅱテモテ1・7)と励ましています。パウロも自らの弱さを知りつつ、主により頼むことを知って、テモテを励ましました。自分の中に力がなくても、むしろ自分の力を手放して、み言葉に聞き従い続けるときに、私たちも「強く、雄々しく」歩むことができます。

主のみ言葉はまた、「共に」と繰り返されています。モーセが強く雄々しく歩むことができた秘訣であり、ヨシユアにも私たちにも与えられている信仰の生涯の鍵です。信仰の偉人たちも、恐れや悩みがありました。ただ神が共にいてくださったことが救いでした。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28・20)と約束される主イエスは、私たちと共にいてくださいます。

結論

自分の弱さを知ることが幸いです。目の前の困難に勝利できるのは、共にいてくださる主に目をとめて、み言葉に聞き従い、勇気をもって前進することによるのです。

研究資料

(宮澤)

主のしもべモーセの死後、モーセの従者ヤンの子ヨシヤがイスラエルの新しい指導者として神より立てられる。ヨシヤは、神ご自身の臨在を根拠として、ただ強く、雄々しくあれと励ましを受ける。イスラエルは、神がその先祖たちに約束された土地を受け継ぐために、新しい指導者ヨシヤを立てて出て行った。しかし、その受け継ぎ方は、ただ自動的に受け継ぐのではない。モーセに与えられた神の律法を忠実に守り、それを心にとめ、強く、かつ雄々しく歩むときに、主は必ず勝利を与えてくださるのである。

テキスト

1 主のしもべモーセが死んだ後 時間的には申命記第34章のモーセの死についての報告に続くものと考えられる。しかし、このくだりには時間以上のものを意味する。まず、イスラエル史の初期の物語を二つに区分する(申命記1:37-38)。前半部は、イスラエルの民の強情と不信仰による荒野放浪の時代であり、後半部は信仰による約束の地の所有である。イスラエルの救いの歴史の中においては、これはまぎれもなく一つの転換点なのである。同時にヨシヤがどのようにして主からモーセの後継者とされたかを扱っている。**主のしもべ** 旧新約聖書を通して重要な神学的用語の一つ。「しもべ」(「エベド」)を神と人との関係において用いる場合、神と「しもべ」との関係が問題視される。その「しもべ」に、神のしもべと呼ばれるにふさわしい資格とか働きとかがあつたわけではなく、ただ一方的な神のあわれみと語りかけにより、神との契約関係に入れられたのである。**ヨシヤ** 彼は出エ

ジプトの始めからモーセの従者として活躍した。そして、モーセがカナンの地に入ることを許されなかった時、モーセの祈りによつてカナン征服のリーダーに任命されたのであつた(民27:15-23)。そして、神の助けによつてこの任務を遂行できると約束された。すなわち、彼がリーダーとして立てられたのは、神ご自身の任命によつたのである。**2 2-9節は、主がヨシヤに対して語られた言葉であり、ヨシヤ記を要約している。同時に、イスラエルの神、主の性格を示しているともいえる。ヨルダン** ヨルダン川。パレスチナを縦断する川。ヘルモン山に水源をもち、死海に向かつて流れこむ。パレスチナの地域では珍しく、一年中水が流れている川である。そこから「ヨルダン」(流れる川)と命名されたのである。

わたしがイスラエルの人々に与える地

シナイ山でモーセに約束された地は、葦の海からペリシテ人の地に至るまで、また荒野からユーフラテス川に至るまでとされていた(出エジプト23:31)。**3 足の裏** ヨシヤ記の中心的な言葉。神の約束による領土の征服も、実際には神の民が一歩一歩足を踏み出すことによつて実現される。

4 申命記11:24の再確認。この箇所は、時間があれば聖書地図などを開いて確認しておくことが望ましい。**荒野** ヨシヤ記においては、ベテルとアイ、あるいはユダの荒野を含み、ヨルダン川西岸とその南側の地域の一般的名称である。**レバノン** ガリラヤ湖の北側にあるレバノン山脈。ただし、正確にはレバノン山脈の東側にあるアンティ・レバノン山脈を指すと考えられている。**日の入る方の大海** 地中海。

5 勝利の約束は、ヨシヤを指導者として立てた神の選択を確かなものとし、ヨシヤが神との関係やイスラエルにおける役割においてモーセと同じものを持つことを他のイスラエルの民たちに認識させる役割をもつ。

6 強く、また雄々しくあれ 本章の中心聖句。本章においては、この箇所のほかにも三度登場する(7、9、18)ことから、その重要さがうかがえる。これはヨシヤが持つべき姿勢であり、この励ましは、モーセからも(申命記31:6-8)、そして神ご自身からも(同31:23)与えられている。神のための戦いの指導者は、弱く臆病であつてはならないのである。しかし、この励ましは根拠もなく語られているのではない。前節における主の臨在の約束とセットで用いられていることに特に心を留めたい。この同種の励ましは、ダビデがソロモンを励ます際にも(歴代上28:20)、またヒゼキヤがその民を励ますために用いた言葉の中にも(歴代下32:7)見ることができ。いずれの励ましの中にも、必ず主の臨在の約束が強調されている。**7 モーセがあなたがたに命じた律法をことごとく守って行い** ヨシヤはモーセの律法に対する服従を欠いては、前節に示された命令を守ることができないのである。

8 この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを読み 詩篇1:1-3参照。思うとは、新改訳聖書では「口ずさむ」と訳されており、繰り返し頭や口の中で反芻し黙想し続けることを意味する。

参考図書 リチャード・S・ヘス『デインデル聖書注解』「ヨシヤ記」(いのちのことは社) 他

聖書 ヨシユア1・1～9
タイトル 勇気をもって前進しよう！
暗唱聖句 強く、また雄々しくあれ

目標 困難の中でも、伴ってくださる神を覚え、勇気をもって前進する。
ヨシユア1・9

導入

(飯田勝)

皆さんは、学校で何か役割を任せられていますか。例えば、生徒会長や委員長、班長など、それは自分から進んでその役割につきましか。それとも先生や友だちから選ばれましたか。もし選ばれたとしたら、選ばれた時どう感じましたか。「どうしよう。困ったなあ。僕にできるかなあ」と不安になったでしょうか。私たちは初めてすることや、人前に立つて話をするとは緊張するものです。でも、その不安や緊張があっても、勇気をもって行うことができるなら感謝ですね。

選ばれたヨシユア

皆さんの住んでいるところには、町長や市長さんがおられるでしょう。もし、その長の人々が皆さんに、「明日からこの街のリーダーになってください。そしてこの街の人々を幸せにしてください」と言われたらどうしますか。びっくりしてすぐに断りますか。

イスラエルの人々は奴隷の地であったエジプトから脱出することが出来ました。それを導いたのはモーセでした。モーセは四十年間、イスラエルの人々のリーダーとして力強く民を導きました。

しかし、そのモーセが死んだのです。そして、神様が次にリーダーとして選ばれたのは、ヨシユアでした。ヨシユアは以前からモーセの側にいてモーセに従っている人でした。また、モーセの働きを見ていました。その時、イスラエルの人々は約百二十万～二百万人もいました。ヨシユアはどのような気持ちだったのでしょうか。

モーセがリーダーであった間には、いろいろなことがありました。ある時は、イスラエルの人々がモーセに反抗したこともありましたが、ヨシユアはリーダーの苦勞を知っていたでしょう。彼は、「自分にはモーセのようにできない」と、リーダーを断ったのでしょうか。

いいえ、ヨシユアは神様からの選り断ることはしなかったのです。

約束を与えられたヨシユア

神様は、リーダーとして選んだヨシユアに、「強く、また雄々しくあれ」と励まされたのです。

皆さんは、日常の生活の中で、苦しいことや悲しいこと、不安に思うことがあるでしょう。そんな時、神様は「強く、また雄々しくあれ」と声を掛けてくださるのです。私たちは、だれも弱い者です。自分のがんばりでは、強くなることはできません。たとえがんばったとしてもなかなか長続きしません。どうしたら強く、また雄々しくあることができるのでしょうか。

神様はヨシユアに素晴らしい約束をされました。それは「あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おのいてはならない」と言われたのです。

ヨシユアは一人ではありません。神様がいつも一緒にいてくださるのです。さらに律法を守るならば必ず勝利すると約束されたのです。律法とは、神様のみ言葉（聖書）です。

この約束は今朝、皆さんにも与えられます。神様は、皆さんが行くところどこにでも一緒に行ってくださいなのです。そして、神様のみ言葉を守る人には勝利を与えてくださるのです。では、皆さんといつも一緒にいて、勝利を与えてくださる神様はどんな方でしょうか。それは皆さんを見放すことも、見捨てることもされないお方なのです。

約束を信じ前進するヨシユア

皆さんは、風邪を引いて薬を飲んだことがあるでしょう。いくら風邪に効く薬でも眺めているだけでは、風邪は治りません。薬を飲む必要があります。そのように、神様の約束を聞いただけでは、その約束を体験することはできません。

ヨシユアには、いろいろな不安があったと思います。でも、彼は神様の素晴らしい約束を信じて進んで行つたのです。ヨシユアには、いろいろな困難が次から次へとおこりました。でも、彼はその困難の中にも勇気をもって前進して行つたのです。それは、神様からの約束をしっかりと心に持っていたからです。

まとめ

今朝、神様は皆さんにも「強く、また雄々しくあれ！わたしはいつもあなたと一緒にいる」と言ってくださいます。皆さんに勇気を与え一緒にいてくださる神様を信じて生活しましょう。

♪おおしくあれ♪（ホーリネス・子どもさんびか106）



聖書 サムエル上3・1-18 テーマ 御声を聞く

序論

(金井信)

先週まで、モーセによる出エジプト、ヨシユアによるカナン入国を見てきました。今日の箇所は、すでに戦いは静まり、一つの国が形成されています。しかし、神の民でありながら、「主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった」とあるように、神様との生きた交わりが失われていました。

そんな時代に、主の言葉を聞き、人々に語る器が起されました。わらべサムエルです。人の秤ではなく、主のお選びになるのは、み言葉を聞く備えのできている者でした。

一、御声を聞く必要

主は「イスラエルよ聞け」(申命記6・4)と語りかけ、律法をお与えになられました。イスラエルの民にとって、律法を守るとは、読むこと学ぶことよりも先に、主の言われることを聞くことでした。

サムエル記の前にある士師記の時代、イスラエルの国は安定せず、しばしば周辺の国々に脅かされていました。ヨシユアの時代の信仰による前進の姿勢は失われ、十二の部族はばらばらになり、祭司の子が平気で主への供え物を軽んじるほど規律が失われていました。人々はその理由を人々は王がないことに求めますが、本当は、主の言葉に聞くことをしなくなったためでした。

主が語りかけることをやめられたではありません

せん。聞こうとする者がいなくなったのです。今も主は聖書を通して語りかけておられます。「主の言葉を聞くことのききん」(アモス8・11)は、私たちの身近にないでしょうか。それともききんに気がつかないほどに靈性が弱ってしまっているのでしょうか。

主のお姿は直接には見えず、お声は聞こえます。しかし、「御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある」(使徒20・32)ことを感謝して、聖書の言葉に聞き従いましょう。

二、はい、ここにあります

〈サムエルよ、サムエルよ〉との主の呼びかけに、サムエルは「はい、ここにあります」と答えます。ただ、主の声とわからずに、祭司エリのもとに走って行きました。サムエルが主の声を聞いたのは、初めから主に対する心構えがあったからではありません。まず人に対してすでに「しもべはここにあります」という思いが備わっていたからです。

いい知らせと悪い知らせ、都合のいい状況と悪い状況、私たちにはいつもその両方が飛び込んできます。その時に、自分の好む方ばかり受け入れようとしてはいいのでしょうか。すべてを知っておられる主に信頼して、「ありとあらゆる境遇に処する秘けつ」(ペリピ4・12)がみ言葉の中には備えられています。

三、しもべは聞いております

エリに教えられて、サムエルは「しもべは聞き

ます。お話ください」と主に答えます。サムエルにとって初めて主と交わり、その言葉を深く心に留める時となりました。サムエルの「聞きます」という言葉は、「聞く準備が整っています。聞き続けています」という意味です。神が語りかけている今このとき、聞いている、聞き続けているということです。聖書を読むとき、まず「主よ話してください」と祈ること、あるいは賛美をささげて主に心を開くことは、決して遠回りではありません。また、主の言葉を「聞き続ける」ことは大事です。聞き続けるときに、耳の痛い言葉も聞こえてきます。しかしそれは愛をもつての忠告です。知らせたくなる福音もありますが、伝えるのにためらいをおぼえるメッセージもあります。これも主の愛から出た警告です。主から出た言葉であるならば、曲げずとどめずに伝えなければなりません。それは、自分がこれからも聞き続けるためであり、聞かされた者たちにも、主のご真実がやがて明らかにされるためです。サムエルはやがて、「主の預言者」(20)と人に認められます。

私たちは新約の預言者です。使徒たちのように「自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」(使徒4・20)と、み言葉を聞き続けるなら、救いの知らせを広く伝える使命を果たすことができます。

結論

主は今も聖書を通して、私たちに語りかけ続けておられます。語られたことに従う思いをもって主の御声に耳を傾けましょう。

研究資料

(中島啓)

ここは、わらべサムエルへの主の招きと、それに対する彼の素直な応答が中心と見なされることが多いが、それだけではない。同様に(あるいは、もっと)重要なのは、主が顕現され、エリの家への裁きを告げる場面である。それは古い指導者が退けられ、新しい指導者が立てられる場面であり、そこを境に二人の立場が逆転するのである。その直前まではエリがサムエルを指導し、神に対して語るべき一言一句さえ授けた。けれども今、神の言葉がエリから取り上げられ、サムエルに授けられるや否や、エリは、もはやサムエルを通してでしか神の言葉を聞けなくなるのである。サムエルのエリに対する敬意と服従は変わらない。けれども、神の前での力は完全にエリからサムエルへと移ったのである。「見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの事をする」(11)。それはエリへの裁きであると共に、主が新たな指導者を通してイスラエルを導いてくださるという宣言でもある。章の冒頭では「主の言葉はまれ」(1)であった。しかし章の終わりでは、人々は「サムエルが主の預言者と定められたことを知」(20)るのである。

テキスト

- 1 **主の言葉はまれで…** 「主の言葉」は神からの啓示(預言)で、続く「黙示」もほぼ同義。「主の言葉を聞くことのききん」(アモス8・11)とあるように、それが無いこと自体が裁きであった。原因はエリたちにあると考えるのが自然だろう。
- 3 **神のともしびはまだ消えず** 幕屋のともし

びは朝までもとす定めであった(出エジプト27・21)ので、夜明けが近かったことを指すのかもしれない。**神殿** 天幕ではなく建物を目指す表現。2・22では「幕屋」と表現されていることから、シロの神殿は幕屋の周りを堅固な構造で覆ったものという推測もある。そこでエリではなくサムエルが寝ていたのは、エリの衰えが理由であった(2)。目的はともしびの番、あるいは神の箱の番であろう。神の言葉を授かるためという説もあるが、サムエルにその心備えがあったとは読み取れない。

4・8 **主は「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた** 主の言葉がまれな時代(1)に終わりを告げる呼びかけであった。はい、ここにありますサムエルのエリに対する敬意と服従が示されている。彼が三度目にエリの所に行くまでのやりとりは大きな違いはない。ただし最初だけ走り、あとは歩いたところに、ことをいぶかしがるサムエルの気持ちが表れているようである。**サムエルはまだ主を知らず** 文字どおりの意味ではなく、後に始まる主との特別な関係を踏まえてのことだろう。

9 **しもべは聞きます** 語られる主に対する適切な敬意が込められた表現。動詞には分詞が用いられており「聞く準備が整っている」という意味。

10 **主はきて立ち** 現実か夢の中かは分からないが、サムエルへの主の顕現は、声だけでなく何らかの視覚も伴ったものであったのであろう。

11 **耳が二つとも鳴るであろう** 裁きの厳しさに仰天するさまを表す表現(列王下21・12)。

12・14 **かつてエリの家について話したこと** すでに2・27以下でエリの家の悪事が暴かれ、それ

に対する裁きも告げられていた。その裁きを確かに実行するという宣言がサムエルに託されたのである。**その家を永久に罰する** 「あなたの家は、永久にわたしの前に歩む」(2・30)とのかつての約束が今や正反対となる。**彼がそれをとめなかったからである** もともと息子らの悪行が原因であったが、それを止めなかった父も責任を逃れることはできない。**永久にあがなわれないであろう** まさに罪をあがなうための供え物を彼らはむさばった。ならばその罪はいつたい何をもつてあがなうことができるか、ということだろう。

15 **サムエルはその幻のことをエリに語るのを恐れた** エリは幼いサムエルにとって父親代わりのような存在であった。彼がそのエリに神の厳しい裁きを告げることを躊躇するのは当然であった。

17 **隠さず話してください** サムエルの様子から大体の察しがついたエリは、彼が遠慮して神からの宣告を割り引くことのないように配慮した。

18 **そこでサムエルは…何も彼に隠さなかった** 預言者の職務は、神の言葉を人に伝えることである。彼は最初の仕事を見事果たしたのである。**どうぞ主が、良いと思うことを行われるように** エリもこの点では立派であった。自らに責任があるとは言え、時代が新しいものと移るために、自らの裁きを受け入れることが難しいのは、たとえば後世のサウルの例を見ても明らかなのである。

参考図書 注解書 R.W.Klein (Word), W.Brueggemann(Interpretation), H.W.Hertzberg (Old Testament Library), N.S. The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書 サムエル上3・1～18

タイトル 神様の声を聞こう！

暗唱聖句 しもべは聞きます。主よ、お話しください。サムエル上3・9

目標 語ってくださる神の御声に耳を傾ける者となる

導入

(飯田勝)

学校の先生、お父さんやお母さんから「しっかりと話を聞きなさい！」と注意されたことはないですか。人の話を聞くことはとても大切なことです。でも、それは難しいことでもあります。今朝、登場するサムエルは、しっかりと聞くことができる人でした。そのサムエルに神様は声をかけられたのです。どうしてサムエルは、神様から声をかけられたのでしょうか。

周りの人に流されないサムエル

少年サムエルのお母さんはハンナと言います。ハンナには長い間、子どもが与えられませんでした。でも、ハンナは祈り続けたのです。そして、神様によってサムエルがお腹に宿りました。ハンナは、せつかく与えられたサムエルを、神様のためにささげました。もし、皆さんのお母さんが「あなたは、今日から教会に住んで、神様のために働きなさい」と言われたら、どう思いますか。

まだ小さかったサムエルは、お母さんに甘えた年だったに違いありません。でも、お母さんの言うとおり、神様に仕えるために、祭司エリのと

ころに行ったのです。

祭司エリには二人の息子がいました。でも、この息子たちは非常に悪い人たちでした。多くの人たちは、祭司のところに神様にささげるささげ物を持って来ていました。でも、息子たちはそれを奪って自分たちの物にしていたのです。おそらく少年サムエルはそれを見ていたでしょう。こんな時、皆さんならどう思いますか。「あの二人がやっているんだから、僕も一回ぐらいいいだろう」と思いますか。サムエルは、この二人のマネはしなかったのです。彼は、悪いことに流されない心を持っていました。

神様に喜ばれるサムエル

サムエルは、年を取っていた祭司エリに一生懸命に仕えました。それは、神様に仕えていることでした。

皆さんは、神様と仲良くしていれば、友だちや親、兄姉と喧嘩(けんか)してもよいとは、思ってませんよね。そうです。神様に仕えるということは、友だちや親、兄姉にも仕えるということです。是非、友だちが困っている時には助けたり、お父さんやお母さんのお手伝いをしたりしてください。

また、サムエルは神様から離れないで、いつも神様の側にいる人でした。そんなサムエルは、人々や神様から喜ばれる人となったのです。

皆さんも、神様や友だちから喜ばれる人となってください。

聞く心を持っているサムエル

ある日、サムエルが一人で寝ていました。する

とどこからか、「サムエル、サムエル」と、自分を

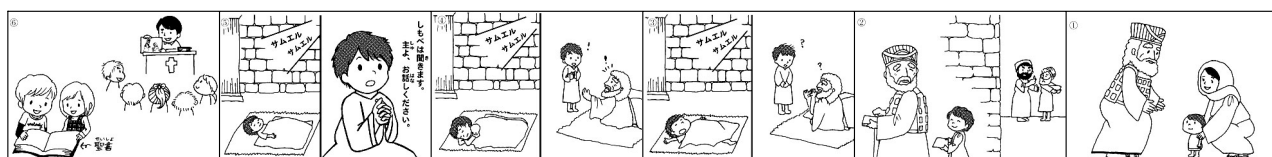
呼ぶ声が聞こえてきました。サムエルは、祭司エリが呼んでいると思って、エリのところに行きました。するとエリは「呼んでないよ。戻って休みなさい」と言いました。サムエルは言われたとおりに戻りました。でも、またサムエルを呼ぶ声がしたので、サムエルは、またエリの所に行きました。でも、エリが呼んだのではありませんでした。そしてまた、三度めに名前を呼ばれたので、エリの所に行きました。そこでやっとエリは、サムエルを呼んでいるのは神様だと分かったのです。それで、サムエルに「今度、声があつたら『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい」と教えたのです。サムエルが戻るとまた、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしました。サムエルは、さつきエリに言われたとおりに「しもべは聞きます。お話しください」と答えたのです。すると神様は、サムエルに大切なことを話されました。サムエルは、神様の声を聞く心をもっていたのです。

まとめ

神様は、聞く心を持っている人に声をかけられます。皆さんは、神様の声を聞こうとしていますか。神様は、皆さんに「わたしの声をしっかりと聞いて欲しい」と願っておられます。神様は、礼拝のメッセーじを通して、また聖書を通して皆さんに声をかけられます。神様の声をしっかりと聞く人に、神様は祝福を与えてくださるのです。

♪わたしは主の子です。♪

(ホーリネス・子どもさんびか88)



聖書 サムエル上16・6～13

テーマ 心を見られる神

序論

(高橋頼)

イスラエル初代の王として選ばれ、立てられたサウル王は、神への不従順のゆえに王位を退けられることとなります。そこで、サウルに代わる王を立てるため、神はサムエルをエッサイの家に遣わします。

エッサイとその子たちがサムエルの前に来たとき、サムエルは長子エリアブに目を留めます。「自分の前にいるこの人こそ、主が油をそそがれる人だ」と考えます。しかし、その判断は、「顔かたちや身のたけを見て」の判断でした。外見で判断しようとするサムエルに神は言われます。「わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」。

次々にサムエルの前に立つエッサイの息子たち。しかし、結局その場に連れてこられた七人の息子たちの中に、神が選ばれた人はいませんでした。末の子が羊を飼うため外にいることを知ったサムエルは、彼を連れてこさせます。彼が現れたとき、主は語られます。「立ってこれに油を注げ。これがその人である」。こうして、エッサイの末の子、ダビデに油が注がれます。やがてこのダビデがイスラエルの王として立てられていくのです。

預言者として神の御声を聞き、民に取り継いできたサムエルでさえ、人の外観で判断してしまっただけを見ます。人々に対する私たちの評価も、案外外側のものだけを見て判断しているのではないのでしょうか。人の内側、内面にあるすべてを見

抜いておられる神は、私たちの評価とは随分違った見方をしておられるのかもしれない。

さて、「心を見られる」神に選ばれたダビデは、どういう人だったのでしょうか。神が見ておられたダビデの心とはどのような心だったのでしょうか。彼の生涯の歩みの中に、その心の資質を見ることが出来ます。

一、勇敢な心(サムエル上17・32～37)

有名なゴリアテとの戦いにおいて、彼の内側に大胆で勇敢な心があったことを見ます。大胆、勇敢な心は、純粹に真つすぐ神を仰ぎ、信じる信仰から来ます。サウルもイスラエルの人々も神を信じていました。しかし、ゴリアテを目の前にして、彼らの信仰は、なお、そこで強く立つことはできず、むしろ萎えてしまいました。現実を目を奪われて、神を見失ってしまったのです。ダビデも、決してゴリアテの巨大さや力を知らないわけではなく、また、自分の小ささを知らないわけでもありません。しかし、彼には純粹に、真つすぐに神を信じる心がありました。神への絶対的な信頼が、彼の勇気を生み出していました。

二、神に従う心(サムエル下2・1～2)

ダビデにはまた、神に従う心がありました。サウル王とヨナタンが死んだ時のことです。ダビデが王として世に出るチャンスがついに来ました。しかし、ダビデは、自分の計画や判断に頼らないで、「ユダの一つの町に上るべきでしょうか(1)」と神に問うて祈ったのです。その時、神はヘブロンに行くように命じられました。そこで、ダビデは家族や自分と共にいた人々を皆連れてヘブロンに行

き、そこに住みました。このヘブロンで、ダビデはユダの人々から油を注がれ、ユダの王となります。

彼の王としての生涯は四十年でしたが、ヘブロンにおいて七年と六カ月ユダを治め、その後、エルサレムで三十三年、全イスラエルを治めました。

ダビデは、生涯の転機とも言うべき時に、自分の思いや判断で行動せず、むしろ自分の思いを屈服させ、神のみ心に従わせました。まさに自分の時だと思えるような状況において、まず、神に問い、神のみ言葉に従うことができるかどうかを試されます。ダビデは、幸いな判断をしたのです。そして、サウルとダビデの決定的な違いは、そこにありました。(サムエル上15・22～23)

三、神を愛する心(サムエル下7・1～2)

ダビデにはまた、神を愛する心がありました。彼が、「自分の家に住み、また主が周囲の敵をことごとく打ち退けて彼に安息を賜った時(1)」、彼の内に、神に対する愛と奉仕の切なる心が湧き起こってきました。「見よ、今わたしは、香柏の家に住んでいるが、神の箱はなお幕屋のうちにある(2)」。主は、ダビデの愛と奉仕の心を喜ばれましたが、ダビデ自身が神殿を建てることを許されず、むしろ主ご自身が「あなたのために家を造る(1)」と言われ、ダビデとその子孫の家を固くし、その王国を長く保つという、ダビデ王朝の確立を約束されました。

結論

神は、私たちの日常生活の様々な出来事の中に、私たちの心を見られます。純粹で真つすぐな神への信頼、転機や危機における全き従順、神を愛する心を見ていただくことができますように。

研究資料

(中島啓)

この章は、退けられたサウルについて悲しむサムエル（15・35）に、主が語りかける場面で始まる。「あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである」（ルカ6・21）。悲しみの季節は終わる。主が新しいことをしてくださるからである。主は、その王を捨てても、その民をお見捨てにはならない。王国と民とが保たれるように、すでに王を選んでおられるのである（13・14、15・28）。けれども、その人が王として立てられるに当たっては、その選びが人によるものではなく、全く神の権威とその主導に基づくものであることが明らかにされねばならない。サウルの場合もそうであったように、油注ぎによって表される主の選びと招きは、人の基準ではなく、神の基準によってなされるのである。

テキスト

6 彼らがきた時 油注ぎのことは安全上の理由でその場の誰にも知らされておらず、サムエルの訪問は「主に犠牲をささげるため」（5）ということになっていった。サムエルがエッサイの子らを順に見ていくときも、誰もその目的を知らなかった。**エリアブ** 長子エリアブはサウルのように印象的な若者として描かれている（9・2、10・23）。**自分の前にいるこの人こそ、主が油をそそがれる人だ** サムエルはエリアブの魅力に引き込まれた。最初は人の基準に頼ってしまったのである。**7 顔かたちや身のだけ** 身長への言及は、サウルを念頭においていることは明らか。イスラエル

に第二のサウルは不要だと言うことだろう。わたしはすでにその人を捨てた「捨てる」は15・23、16・1にも登場する言葉。王としての、神の選びの基準に達しなかったと言うこと。**主は心を見る** 必要な基準は外見ではなく、正しい心だということ。ソロモンが神に求めたものは、まさにこれであり、それを主は喜ばれた（列王上3・9～10）。**8～10 七人の子** 残りの兄弟も誰一人として主の水準に達していなかった。七は完全数。人の基準ではかるものは、ことごとく神の前にはじかれるということを示すのかもしれない。

11 まだ末の子が残っていますが羊を飼っています 主が目を留められる人物は、しかし人の基準では、その選択肢にすら入っていなかった。エッサイや村人たちは、ダビデが年少で、社会の祭儀に参加できる年齢に達していなかったたので、彼のことを全く考慮に入れていなかったたのであろう。けれども「その子たちのうちに」（1）という主が示された範囲に、確かにダビデも入っている。人は目に留めずとも、主は彼をずっと前から心に留めておられたのである。ここに主の選びの法則がある。「神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」（1コリント1・27～28）。**人をやって彼を連れてきなさい。彼がここに来るまで、われわれは食卓につきません** 長老たちも含めたその場の全員が、数にも入らない年少者をうやうやしく待つのは不思議な光景だったろう。羊を飼う場所からダビデが戻ってくるまでは、少なからぬ時間があつたはず。それは王を待ちわびる

イスラエルを象徴する光景なのかもしれない。

12 血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人 ダビデの美しい容姿は、ここまで述べられてきた基準とは一見矛盾するようにも思える。しかし外面の美しさと心の正しさとはまったく別の基準である。私たちは外見に惑わされて、それを理由に選ぶことも退けることもしてはならないのである。エリアブのときは、その容姿からサムエルが判断したが、ダビデに関しては、主なる神の判断であつて、人は関与していない。**立ってこれに油をそそげ。これがその人である** サムエルはまったく神の指示に基づいて、ダビデに油を注いだ。

13 兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ 長老たち（4～5）も立ち会った可能性は高いが、サウルの場合と同様に（9・27～10・1）、ダビデの油注ぎもひそかに行われた。この日からのち、**主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ** サウルや士師たちのように一時的にはなく「この日からのち」とあるように継続的に主の霊が彼と共にあつた。そしてその血筋を受け継ぐ者として救い主がお生まれになり、その油注ぎに相当するバプテスマの際に、神の霊がその上にくだるのである。このエピソードの中で、主役と思しきダビデの声は聞かれない。けれどもそのことがメッセージを明確にする。すなわちこの油注ぎが始まる、ダビデの王としての即位、王国の隆盛、さらには救い主に至る系譜といった一連の出来事は、人のわざによらず、まったく神の恵みに満ちた主導によって行われるのだ、というメッセージである。

参考図書 10月31日分と同じ

聖書 サムエル上16・6～13
タイトル 人の目？それとも神様の目？
暗唱聖句 人は外の顔かたちを見、主は心を見る。 サムエル上16・7
目標 心を見ておられる神の前に生きる。

導入

(和田治)

「なんとなくこわそうだな…いやな感じ」。転校生の武君を見て、博君は思いました。大きな身体で、目つきが鋭くて、こわそうな感じがしたので。ところが、休み時間に思い切って博君が声をかけてみると、「やあ、声かけてくれてありがとう！仲良くしてね」とにっこり！博君は「見かけだけで武君をこわがったりして悪かったな…」と思いました。皆さんも、だれかの顔や服装などを見て、その人のことをなんとなく「こんな人に違いない」と決め付けてしまうこと、ありませんか？お互いの心の中までは見れないから、顔かたちであれこれ思ってしまうやすいですね。でも、神様は私たちの『心』を見ておられるんです。

神様選ばれた王はだれ？

「いつまでサウルのことでくよくよしているのか」。神様に選ばれたのに、神様に背いてしまったサウル王のことを思っがっかりしていたサムエルに、神様からお声がかかりました。「もうわたしは、サウルを退けたのだ。さあ、ベツレヘムへ行き、エッサイという人を捜しなさい。その息子の一人を、すでに新しい王に選んでいる」。そこでサムエルは出かけました。

エッサイの家に着くと、サムエルは心の中でつぶやきました。「いったいだれだろう、神様がお選びになった王は」。そして、エリアブをひと目見るなり、ピンと来たのです！「そうだ、この人だ！この人こそ次の王様に違いない！」その時、神様の声が…！「顔や背の高さは関係ないのだよ、サムエル。彼ではない。わたしの選び方は、お前の選び方とは違うのだよ」。

そう言えば、サウル王は人より頭一つ分背が高かったんですね。エリアブもきつと、背が高くて力強そうで、王様にふさわしい姿に見えたのでしよう。神様にずっと用いられてきた預言者サムエルでさえ、勘違いしちゃいましたね。神様の選んでいないエリアブを、「この人こそ！」って。確かに、神様の見方と人の見方は違うんですね。

「わたしは心を見ています」

サムエルの見方は神様の見方とどこが違ったのでしょうか？神様は言われました。「人は外の顔かたちを見るが、主なるわたしは心を見ていますのだ」。そうです。私たちは人の外側を見ることはできて、心の中までは見れないですね。でも、神様は心の正しさをちゃんとご覧になっているのです。エリアブの弟たちが、次々とサムエルの前を通りました。その度に、「主が選ばれたのはこの人でもないぞ」とサムエルは言いました。「もうほかに息子さんはいないのかね？」「いいえ、まだ一番下のおります。今、牧場で羊の番をしておりますが」。「すぐ呼びにやってくれ」。こうして呼び寄せられたダビデがサムエルの前に来た時、神様がおっしゃったのです。「この人だよ、わたしが選んでいるのは」。みんなびびくり！だって、一番年下の

ダビデの外の顔かたちは、まだまだ子どものようだったのですから。

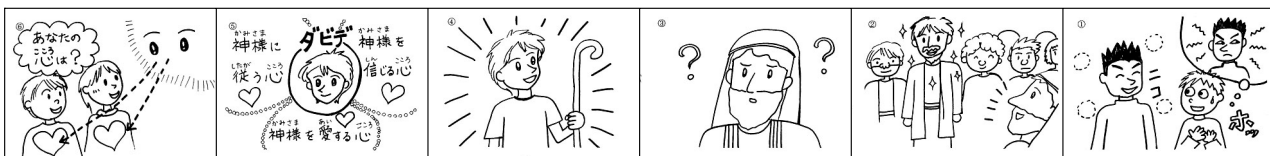
神様が喜ばれる心

もう一度神様がサムエルに語られた今日の暗唱聖句を、声を合わせて言ってみましょう。「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」。ダビデの心を見て、主は彼をお選びになったのですね。では、神様に喜ばれる心ってどんな心でしょう？この後、ダビデは自分よりもずっと大きな体をした、無敵の兵士、ペリシテ軍最強の男、巨人ゴリアテと戦います。みんながゴリアテを怖がって戦えなかったのに、ダビデは神様が守ってくださることを信じ、ゴリアテに立ち向かいました。なんて勇敢なんでしょう！そして見事、彼を石投げで倒したのです！ダビデの勇気は、「神様を信じる心」、「神様に従う心」、「神様を愛する心」からあふれ出てきました。神様が喜ばれるのは、ダビデのこのような心なのです。

結び

あなたは、あなたの外側しか見ることができない「人」の目が気になりますか？人からどう思われるか、を大切にし、人の前で生きていきたいですか？それとも、心を見ておられる神様の目を思い、神様の前に生きていきたいですか？神様は、ただ心を見ておられるだけでなく、その心をきよく、正しく導いて下さるのです。神様の目から見たあなたの心はどんなかな？「神様を信じる心」、「神様に従う心」、「神様を愛する心」？神様に喜ばれる心を、「お与えください」って祈り求めましょう。神様が与えてくださいますよ！

(ふくいんこどもさんびか2・24)



聖書 列王上17・15・7 テーマ 生きて働かれる神

序論

(高橋頼)

預言者エリヤはイスラエルの王アハブに言います。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます」。エリヤのように私たちも、生きて働かれる神を覚えましょう。

一、祈りに答えられる神(1)

「イスラエルの神、主は生きておられます」。この言葉は、エリヤの信仰を言い表わします。同時にこの言葉は、だれもが使うことができる敬虔な信仰表現でもあります。しかし、生きておられる神を、言葉だけでなくその実質をもって私たちが知りうるのは、しばしば、私たちの祈りを通して神を経験することからです。その時、私たちはこの言葉を真実な信仰の言葉として、確信をもって告白することができます。

エリヤは、偶像礼拝が国を覆い、イスラエルが主にそむいて御名を汚している状況に、激しく泣き、切に祈りました。そして、ついに一つの確信を得ます。この神のみ言葉(申命記11・16・17)がなされる以外に、イスラエルが主に立ち返る道はないことを知りました。そして、「わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」と、アハブの前で断言したのです。

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった」(ヤコブ5・17)。信仰は、スローガンでも、パフォーマンスでもありません。その人の神との生きた関係であり、祈りを通してのリアルな神体験です。

二、訓練される神(3)

神は、エリヤに「身を隠す」ように命じられました。「身を隠すことを学ぶ人だけが、神の権威をもって人の前に現れることができる」。また、その所こそ、神の人がさらにまざる奉仕のために備えられる場所である「沢村五郎」聖書人物伝。神がエリヤを訓練するため、最初に選ばれた場所は、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとりです。その訓練の学科は、神への完全な信頼と服従です。訓練の中心は、ケリテ川の水とからすによって養われることを通し、どんな状況や環境の中にあっても、神と神の言葉に信頼して、そこに留まり続けることでした。ケリテ川の水は、日々に枯れていきます。もはや、最後の一すくいの水を残して枯れ果ててしまうところまで来しました。しかし、エリヤは、神の言葉に信頼して静かに留まり続けました。決して、自分で自分を救うために立ちあがることをしません。まさに水が完全に枯れ果てたその時、主はエリヤに声をかけられました。「立つてシドンに属するザレパテへ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」(9)。主の訓練の第二ステージが備えられていました。

「不信仰は、神と自分との間に事情を置く。そのため雲を隔てて月を仰ぐように、神を拝することが出来ない。しかし、信仰は、事情と自分との間に神を置く。それゆえどんな事情環境の中にあってもなお、泰然としていられることができる。エリヤは、ただ主の御手に支えられていた(沢村五郎・前掲書)。

三、養われる神(4・6)

ヨルダンの東にあるケリテ川の場所は、今日明らかではありません。当時も、人里離れたところであつたでしょう。だれでも、住みなれたところから離れ、そのような寂しい場所に行くことには不安があります。どのようにして生きていくのか、どうして食べていったらよいのか、全く当てがありません。もしエリヤに少しの躊躇があつたとしても、不思議ではありません。その時、神は「わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」と約束されました。いくら、神様のお言葉でも、からすの養いに身を委ねることが、果たして出来るでしょうか。しかし、エリヤは、神の言葉に従いました。彼を養うのは、からすではなく、ザレパテのやもめでもなく、そこに自分を遣わされた神、自分が告白する生ける神であることを信じたからです。

かつて、一人の若い伝道者に、北陸の過疎地に身を投じ、長く伝道してきた宣教師から招聘状が届きました。そこにはこう書かれてありました。「ここは難しい地です。しかし、あなたが信仰をもって来るなら、大いに可能性がある地です」。何の保証もありません。しかし、彼は、神からの挑戦を感じました。現在、その地に教会が建ち、地域に影響力を持つ力強い宣教がなされています。

結論

祈りをとおして生きておられる神を知り、その神の訓練を受け、生きて働かれる神は、養いの神であることを知らせていただきましょう。全き信頼、徹底した服従、思い切った献身の生涯を主にささげましょう。

研究資料

(中島啓)

預言者エリヤが登場するこの章は、冒頭の宣言(1)と、それに続く三つのエピソード、すなわち、①荒野で養われるエリヤ(2〜7)、②粉と油の奇跡(8〜16)、③やもめの息子の復活(17〜24)、とから成るが、それらのつながりに目を留めて理解することが必要である。例えば、干ばつを宣言したことがエリヤの荒野行きの必要性を生み、ケリテ川が枯れたことが彼をザレパテへと向かわせる。干ばつはまた食物の不足につながり、それが粉と油の奇跡の前提を生むのである。もちろんそれらのことは偶然的の成り行きでそうだったのではない。「主の言葉」(2、8)がエリヤの行動を決定づけ、さらにはエリヤを養うからすやもめさえも(彼らが意識しているかどうかは別として)主の命令に基づいて行動するのである(4、9)。これら三つのエピソードに共通する問題は死であり、その解決は命である。その答えを与えられるのは「生きておられ」る神(1)以外にない。そのことを、命のない偶像により頼む王や国民に判らせるために、この三年間の干ばつの期間は、時間として必要であり、またエリヤの訓練のためにも必要であったのである。すなわち、この三つの出来事を通して、エリヤの姿勢は受動から能動へと移っていく。最初は単純に従い、養いを受けるだけであったが、最後は、率先して神に聞かれる祈りをささげたのである。「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました」(24)とのやもめ

の告白は、彼が今や攻撃に転じ、バアルとの公の対決に向かう準備が整ったことを知らせる合図と言える。その中で、ケリテ川でからすの養いを受ける従順は、次元の低い初步ではなく、すべての基本となる大切な信仰の土台なのである。

テキスト

1 テシベびとエリヤ テシベの位置は不詳。エリヤという名は「主(ヤ)はわたしの神(エリ)」の意で、まさに彼の使命を象徴的に表している。**アハブ** アハブと妻イゼベルの方針は、バアルを「主」に取って代わるイスラエル国家の神とすることであった。バアルとは、フェニキヤに由来し、カナン人も崇拝した偶像で、稲妻と雨の神、そして大地に豊穡^{ほうじく}をもたらす神とされていた。**わたしの仕えているイスラエルの神** 「アハブは彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にまさってイスラエルの神、主を怒らせることを行った」(16・33)とあるように、イスラエルの神、主を、イスラエルの王は自分の神としなかったのである。**主は生きておられます** 主なる神は「生ける神」であり、ご自身の民の必要に応えてくださるという点において、他のすべての神々と根本的に異なる。**わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう** 降雨と豊穡は言わばバアルの専門分野であった。よって水をとどめることも、再び降らせることも、主の言葉次第であるとの宣言は、バアルへの挑戦でもあった。雨が降らないことが何年も続くとは普通ありえないことで、偶然を頼みとするならば、バアルが圧倒的に有利であった。その上で、もしこの宣言どおりになるならば、主こ

そ神であることがはつきりと示される。18章における有名な対決は、この時から始まったのである。**3 ケリテ川** 正確な場所是不明。川の種類はワジ(雨期のみ水が流れる谷)。荒野での(鳥による)養いは出エジプトの出来事を想起させる(出エジプト16・13)。**身を隠しなさい** エリヤを敵の手あるいは飢きんから守るためであろう。ここに象徴的な意図を見出そうとする注解者もいる。雨は定期的に降るものとバアル信者たちは考え、期待した。その雨が、この時のエリヤのように、神の手によって隠されるという暗喩である。

4 **その川の水を飲みなさい** 全土は深刻な干ばつとなり、すべての川は干上がった。その中で、雨がなければ真つ先に干上がるはずのワジに水が満ちていることは、生ける神の力の表れであった。さらに神は、からすを通してエリヤを養い、ザレパテのやもめの粉と油を尽きないようにされたのである(16)。**からす** ワジのような荒れた岩場に巣を作り、余分な食物を貯える習性がある。

6 **朝ごとに…また夕ごとに** 一日二回の肉は古代パレスチナではぜいたくなことであった。このことから、敵の手からというより、むしろ飢きんからの守りの色合いが強いと言えるかもしれない。**7 しばらくしてその川はかれた** 力及ばずということではもちろんなく、計画が次の段階に進むためであった。そしてエリヤはバアルの本拠地とも呼べるフェニキヤに乗り込んでいくのである。**参考図書** 注解書 S. J. De Vrie (Word), R. Nelson (Interpretation), その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

列王上17・1〜7

ほんとに生きておられるんだ、

主は！

暗唱聖句

わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。

列王上17・1

目標

生きて働かれる神を信じる。

導入

(和田治)

ある小学校の帰り道のこと、小学生たちが、通学路にあるお地藏さんの前で手を合わせて拝んでいました。教会学校に通っている高志君は、思いいしたって、かないっこないのにな……。

さて、皆さんは聖書の神様、この世界を造られた主なる神様について、教会学校で学んできましたよね。じゃあ、もしお友だちから、「聖書に書かれている神様って生きてるの？生きてないの？」って尋ねられたら、どう答えますか？今日は、「私の仕えている主は生きておられます」とはつきり言うことができたエリヤに注目しますよ！

主なる神様は生きておられる

「え〜っへん！わたしはこのイスラエル王国の王様、アハブじゃ！これからはこの国の神様はバアルじゃ！皆、バアルを神として拝むのじゃ。主なる神など神ではないわ！」大変です。アハブ王という悪い王様が奥さんのイゼベルと一緒に、バアルという偽の神を拝むようにイスラエルの人たちに命令したのです。みんな、石や木でできた、命のない神を拝むようになりました。もちろん、主なる神様は

お怒りです！そこで、エリヤが預言者として遣わされたのです。エリヤは言いました。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます！」

そうです。人間が考えて作ったような、命のない偽物の神様とはわけが違います。バアルを拝んでいる人々は、バアルが雨を降らせてくれている、と信じていました。まっさか〜！雨も太陽も、植物も、この世界のすべては、造り主でいらつしやるまことの神様がお与えくださっているのですよね。生きておられる主なる神様だけが、雨を降らせ、また、命を与え、命をお育てくださるのです。

主なる神様は祈りに答えてくださる

エリヤの心には、昔モーセを通してイスラエルの民に語られた主なる神様の言葉が迫ってきていました。「もし偽の神を拝んだら、主はあなたがたに向かつてお怒りになり、天を閉ざされるでしょう。雨は降らなくなってしまうです」。エリヤは祈りました。「主なる神様、どうかあなたが生きて働いておられることを、人々に分かせてください。雨をとどめてください。そしてイスラエルの民に気づかせてください、あなたこそ生きて働かれるまことの神様であられることを！」そして、エリヤはアハブ王にきつぱりとこう言ったのです。「私が何かを言わない限り、ここ数年、一滴の雨も降らず、露も降りません！」

もし、雨が降ってきたら、アハブは言うでしょう。「へん！それ見ろ。主なる神など、雨をとどめることもできぬ。やつぱり生きている神などではないのじゃ！バアルこそ神なのじゃ〜！」でも、主なる神様はエリヤの祈りにお答えくださり、それからぴたっと雨が降らなくなったのです！

ヤコブ5・17にはこう書かれています。「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかつた」。エリヤも私たちも同じ人間！私たちが信じてお祈りすれば、神様は答えてくださるんですよ！やったく〜！

主なる神様は養ってください

やがて主はエリヤにおっしゃいました。「ここを離れ、東の方に行き、ケリテ川のほとりに隠れなさい。そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなを養わせよう」。からす〜？だれもいないところであななの世話をからすにさせる、と主がおっしゃったら、どうします？「からすになんてまかせられないよ〜」って思いますよね。でも、エリヤは、主なる神様のおっしゃるとおりになりました。「生きておられる神様なら、からすを使つてでも、わたしを養ってくださいるに違いない！」と信じたからです。そして、な、なんと！本当にからすが毎日欠かさず朝と夕方と、エリヤのところパンと肉を運んでくるではありませんか！いや〜驚きですね〜！そうです、主なる神様はエリヤを、そして、信じる私たちを、ちゃんと養つていてくださるのです。

結び

命のない偽の神ではなく、生きて働かれる主を信じるって、すごいことですね。主なる神様は私たちの祈りに必ず答えてくださいます！だって、生きて働いておられるんですもの！そして、私たちを愛して、身体も心も魂も養つて、育んでくださるのです。安心して、主にまっすぐに従おう！

♪まことの神様♪(教会学校さんびか・3)



聖書 ダニエル6・10～24

テーマ 神を頼みとして

序論

(高橋頼)

法律に反しても、神への祈りをやめなかったダニエルは、ししの穴に投げ込まれました。しかし神は、ししの口からダニエルを守られました。では、神の守りとは、どのような人に与えられるのでしょうか。

一、真の神にのみ祈る人(10)

ダニエルは、彼を妬む者たちが策略をめぐらせた文書に、王が署名したことを知っていました。それにもかかわらず、自分の家に帰り、エルサレムに向かって開かれた屋上の窓もそのままに、(以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した)のです。何もかも知りながら、まるで何もないかのように、いつもと同じく、ただ信仰の良心に従い、祈りをささげました。彼の内に確立されている日々の信仰生活を確信をもって生きる、老信仰者の姿に、私たちは、驚きと感動を禁じ得ません。何と力強い堅固な信仰でしょうか。ことあるごとに、恐れ、迷い、信仰が揺さぶられてしまう私たちにあって、眩いばかりです。

ダニエルの祝福された人生の秘訣は、神への礼拝と祈りを第一とする生きかたを貫き通したことです。それは、どんな時、どんな状況の中でも揺るぐことなく、ぶれることなく、変わらなかったのです。

今日、私たちもダニエルのように、祈りと礼拝

において神第一を貫く決意をする必要があります。この世の激しい逆流と、偶像が跋扈する霊的暗闇の世に生きていながらも、内には揺るがぬ確信と霊的自由をもって生き抜くために、です。

二、神の前にきよい人(22)

ダニエルは、王の前に、自分が神の御介入による奇跡によって獅子の穴から助け出された理由を説明して言いました。(これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったのです)と。

ダニエルは、神の前に罪を犯さず、清い生き方を貫きました。また、人の前にも忠実に生き、彼の生活には何の裏表もありませんでした。ですから、彼の敵でさえも、彼の内には何らの怠慢も欠点も見つけだすことが出来なかったのです。

しかし、清い生き方がこの世の人々に必ずしも受け入れられるわけではありません。むしろ、ダニエルのように煙たがられ、あらぬ批判を受け、憎まれ、迫害を受けるのがこの世の常です。人となられた主イエスの地上の歩みはまさしくそのとおりでした。私たちも神の前に、また、人の前に清く真実に生きることを恐れてはなりません。この世において誤解され、批判され、憎まれることを覚悟しなければなりません。いえ、そこにこそ私たちの使命があるのです。義のために迫害されるものが、地の塩、世の光となるのですから(マタイ5・10～16)。

三、神に信頼する人(23)

ダニエルが獅子の中から出された時、その身に

は何の害をも受けていませんでした。(これは彼が自分の神を頼みとしていたからです。これは、ダニエルがかなり高齢になっていた時の出来事です。若き日に、バビロンに捕囚として連れて来られた時から約七十年、終始一貫、主に信頼し続けてきたダニエルの信仰の姿がそこにあります)。

ダニエルは、異邦の国、偶像崇拜の民の真ただ中に、奴隷の民として生きて来ました。人がどう思い、何と言おうが、世間がどういう態度をとろうが、自分が信頼する神をのみ恐れ、忠実に仕えて生きることを貫きました。そのため、どんな迫害や苦しみを受けるかは、ダニエルにとって全く問題ではありません。ダニエルの神への深い信頼、ひたすら神に仕える忠実な信仰の生き方は、全くゆるぐことがなかったのです。ダリヨス王は(生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか)と言っています。ダニエルの信仰を通して、側近く仕えるダニエルが礼拝している神、彼が信頼する神こそが、真の神、全能の神であることに気づいていたのです。この出来事は、神に信頼する者に与えられる試練が、周囲にどんなに大きな恵みの機会となるかを教えています。

結論

偶像の国バビロンにおいて、政治の中枢にあって生きたダニエルの信仰と生活は、異教社会・日本に生きる私たちにとって、確かな示唆と大きな励ましを与えます。揺るぐことのない一貫した祈りと神礼拝、神と人の前に清いその生き方は、彼の神に対する絶大な信頼にあったのです。

研究資料

(中島啓)

ダリヨス王は、ダニエルを総理大臣のような立場に抜擢しようとした(3)。それをねたんだ敵対者たちは、彼を訴える口実を探したが見つからなかった(4)。そこでその信仰心を利用して、ダニエルを陥れようと企んだのである。王に背くか、背教するか、ダニエルがいずれを選んで、敵対者の勝利のように思われた。けれども神によってダニエルはししの牙から守られ、敵対者たちは自らの謀略によって破滅を招いたのである。

この箇所メッセージは、神により頼む者は、必ず現実の死のわなから守られるということではない(現実には、教会の歴史の中に多くの殉教者がいる)。大切なことは、自分の望むとおりにことが進むことではなく、神を中心とする見地に立つて生きることである。死から解放されるか、そうでないのか、それは神の御手の中にあることであって、いずれを通してでも、神の栄光があらわされ、神の計画が前進することが重要なのである。

この書の最終章では「その時：あの書に名をされる者は皆救われます」(12・1)と、究極の救いの約束がなされている。ししの穴からのダニエルの救いは、その来るべき究極の「死の穴」からの救いを先取りし、約束するものと言えよう。

テキスト

10 **その文書** 「今から三十日の間は、ただあなた(王)にのみ願ひ事をさせ、もしあなたをおいて、神または人にこれをなす者があれば、すべてその者を、ししの穴に投げ入れる」(7)という禁

令。王を敬うというのは建前で、実際はダニエルを陥れるという自分たちの欲望のために王の権威を悪用する法案であった。**署名された** 不正な方法(ダニエルを排除しての建議)で提出された法案であっても、王が署名したならば有効であることを、ダニエルは知っていた。**二階のへやの窓の開かれた所で** 祈りがもてはやされる時には隠れて祈るべきであるが(マタイ6・6)、禁令のもとで隠れて祈るなら、神よりも世の権力を恐れることになる。**以前からおこなっていたように** よってダニエルは以前からの祈りの習慣を変えなかった。**一日に三度ずつ、ひざをかめて神の前に祈り** 朝と夕の一日二回、立つて祈るのが一般的であった(歴代上23・30)。ダニエルが日に三度、ひざまずいて祈ったことは、特別な厳粛さ、祈りの必要性、そして謙遜を示すのだろう(列王上8・54、エズラ9・5)。**感謝した** 「夕べに、あしたに、真昼に」(詩篇55・17)と、日に三度祈った詩人は「主はわたしがたたかう戦いからわたしを安らかに救い出されます」(詩篇55・18)と信頼を告白した。ダニエルの、祈りに続く感謝は、それと同種の信頼を表すのだろう。

12 **ししの穴** 狩猟のときに(おそらく獲物として)放つために、王宮でライオンを飼育していたのである。ペルシャ時代については記録がないが、アッシリヤでは猛獣の檻に犯罪者を入れる公開処刑があったことが知られている。

14 **王は…大いに憂え** 王は総監たちの策謀を知って憤り、彼らに見事に操られてしまった自らを恥じ、意図せざることとはいえ、信頼するダニエ

ルを窮地に追いやってしまったことを嘆いた。**15 変えることのできないもの** 王といえども法を曲げることはできない。それは、社会秩序の根底からの崩壊につながるからだからである。

16 **どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように** ダニエルを救いたい一心で、王が願ったのは、ダニエルが仕える神に対してであった。王以外への願ひ事を禁ずる法律に、王自らが違反していることになる。私的、内面的なことを禁ずる点で、そもそも無理のある法律であった。**17 これを封印した** 受刑者に他者の助けを届かせないための措置だが、救いが神によるものであることを明白にする役目も果たすことになる。

18 **その夜は食をとらず** 王は、自分の愚かさを悔い、わらにもすがる思いで祈ったのだろう。

19 **朝まだき起きて** 拷問に朝まで耐えた囚人を赦免する慣習がバビロンにあったようで、それがダリウスの世にも続いていた可能性は高い。それで、彼は夜明けを待ちわびたのかもしれない。**20 生ける神のしもべ…神はあなたを救って…免れさせることができたか** 「生ける神」という表現に、すでにこの問いに対する答えがある。すなわち、生ける神ならば彼を救うことができるし、救えないならば生ける神ではないのである。

22 **わたしの神はその使をおくって**…三人の友人たちの場合(3・25)と同様に、神は試練のただ中に助け手を送って、ダニエルを守られた。

参考図書 注解書 J.E.Goldingay (Word), W.Stowner (Interpretation), その他 The IVP Bible Background Commentary, OT

聖書
タイトル
暗唱聖句
目 標

ダニエル 6・10～24
ライオンだつて怖くない！
彼が自分の神を頼みとしていた
からである。ダニエル 6・23
神に従い、神を信頼する者を神
は守ってくださると信じる。

導入

(和田治)

みんなは「おぼれる者はわらをもつかむ」って
ことわざを聞いたことがありますか？自分が危な
い時は、頼れそうもないものにまで頼ろうとする
ことのたとえです。でも、おぼれているときにわ
らをつかんだつて、ぜんぜん頼りになりません
よね…。今日は、本当に頼れるお方に頼つて、と
んでもないピンチの時に見事に守られた人のお話
ですよ。どんなピンチだったのかな…。

神様に従ったダニエル

「おのゝれくダニエルめ…！」バビロンの王ダ
リヨスのもとで働く役人たちは、ダニエルが憎く
てたまりません。だつて、王様の命令で、ダニエ
ルが王様の次に偉い立場になったのですから。「奴
隷のくせになまいきな！なんとかして、ひきずり
おろしてやる！」でも、神様を信じるダニエルは
きよく正しい人でしたので、どんなに荒さがしを
してもむだでした。そこで彼らは、王様をその
かして新しい法律を作ったのです。「これから三十
日間、王様以外のどんな神にも人にも祈りをささ
げる者があれば、ライオンの穴に投げ込むこと！」
ダニエルは、そのとんでもない法律が定まった
ことを知って、家に帰りました。一日に三度ずつ、
ひざをかがめて心からのお祈りを、神様に毎日欠

かさず献^{ささ}げてきたダニエル。でも、今度そんなこ
とをすれば、新しいその法律を破ることになり、
ライオンの穴に投げ込まれてしまいます。もうダ
ニエルはお祈りを止めてしまうのでしょうか…。
いいえ！なんと、彼はこれまでと何にも変わら
ず、エルサレムに向かって窓の開かれたところで、
神様へのお祈りを献^{ささ}げているではありませんか！
どうしてダニエルは、そんなことができたので
しょうか。それは、ダニエルにとつて、人間の作
った法律に従うことよりも、神様に従うことの方
が大切だったからです。法律やルールは大切で
すが、もし神様に従うことと反対ならば、その法律
よりも神様に従う方が大切ですよ。ダニエルは
命をかけて神様に従おうとしているのです。

神様を信頼したダニエル

「くうくくくくくく！まんまとはまったな。こ
れであいつもおしまいだ！」さつそく役人たちは
王様に報告しました。「王様！ダニエルが法律をや
ぶり、一日に三度ずつお祈りしておりますぞ！」
さあ大変！王様は心配でたまりません。だつて、
王様はダニエルのことをとても深く信頼している
のですから。何とかダニエルを救うことができな
いだろうかと、あれこれ考えましたが、いつ
たん決まった法律は王様でも変えることができま
せん…。とうとうダニエルは、ライオンでいつぱ
いの穴に投げ込まれてしまったのです。

「ダニエルく！どうか、あなたがいつもお祈りし
ている神様が、あなたをお救いくださるように！」
王様はそう叫んで、宮殿に帰って行きました。ダ
ニエルのことが心配で、食事ものどを通りません。

夜も全く眠れませんでした…。

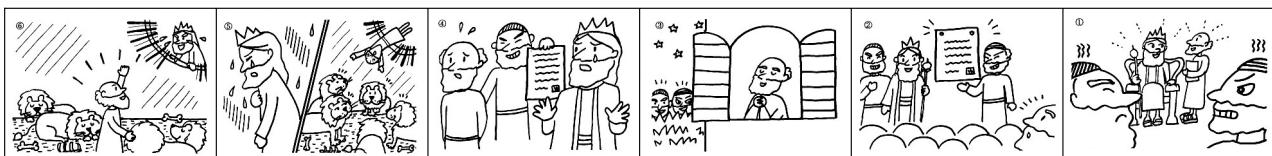
ダニエルを守ってくださった神様

朝早く、王様はライオンの穴に向かいました。
そして、悲しそうな声で呼びかけます。「ダニエル
よく！あなたの神様はあなたをライオンから救っ
てくれたか！」すると、人の声が！「王様く！
私の神様は私をライオンからお守りくださいまし
たよ！」ダニエルです！さすが神様！ダニエル
は神様にしっかりと守られ、けが一つありません！
「こんなことがあつても神様に従い続けよう！」。
心からそう願つて生きてきたダニエルは、自分の
力でも王様の力でもなく、ただ神様に頼つていま
した。だから、神様はダニエルを守ってくださっ
たのです。今でも、神様に従い、神様を頼るすべ
ての人を、神様は必ず守ってくださいます！

実は、神様に従い、神様を信じていても、ひど
い目にあつたり、苦しめられたり、中には本当に
殺されてしまった人も世界中にたくさんいます。
その人たちを神様は守ってくださらなかったのだ
でしょうか？そうではありません。その人たちの魂
を、神様は御手に抱き、この地上のどんな場所と
も比べることができないほど安全で素晴らしい「天
国」で守っていてくださるのです！

結び

多くの人たちは、自分の力を頼りに生きていま
す。でも、神様に従う私たちは、ただ神様を信頼
して生きていくのです。みなさんはだれに頼つ
ていますか？神様に従い、頼るなら、神様は必ず
守っていてくださいます。ありがとうございます、神様！
♪主が私の手を♪（子どもさんびか・89）



聖書 マタイ1・18～25 テーマ キリストの誕生

序論

(高橋頼)

マタイによる福音書に記されたキリスト誕生の次第を通して、キリストがどのようなお方であったのかを学びます。

多くの宗教において、その教祖の誕生については、ほとんど語らず、むしろ、神秘的な存在とするために意図的に隠されていると言われます。ところが、主イエスの誕生については、(むろん、主イエスは、教祖の類ではありませんが) 反対に、驚くべきその誕生の次第が明確に記されています。隠しきれない明らかなキリスト誕生の次第、誕生の出来事の中に啓示されたキリストのお姿はいったいどのようなものだったのでしょうか。

一、預言された誕生 (22～23)

ヨセフに夢の中で現れた御使いは、マリヤが聖霊によって男の子を生むことを告げました。ヨセフに対するこのようなメシヤ誕生の告知について、マタイは「すべてこれらの事が起つたのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである」と記しています (22)。

マタイは、ヨセフに対する告知が旧約聖書、イザヤ7章14節の成就であることを見ました。

この預言は、イザヤの時代においては、イザヤの子の誕生において成就しました (イザヤ7・14、17、8・3～4)。イザヤの子の誕生がインマヌエル、神の臨在のしるしとなったのです。

しかし、同時にマタイは、このインマヌエル預

言の究極的な成就が、御子イエスの誕生で実現したのだと言います。主イエスの到来において、「神が私たちとともにおられる」のです。

二、処女を通しての誕生 (18～20)

私たちは、「聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ」信仰告白をしますが、処女マリヤに子が宿ったことは、現代人にとって信じがたいことです。また、厳格なユダヤ人にとつては、処女降誕の記事は、イエスと言う人物の卓越性を示す以上に、物議を醸す内容です。まさにつまずきの種となる問題です。

しかし、処女降誕の事実を受け入れるか受け入れないかは、突き詰めていうなら世界観、神観の問題です。聖書が教える神、この宇宙を創造し、あらゆる自然法則を支配される神を信じるなら、処女降誕は問題ではありません。すべてを司り、支配される全能の神が、処女から一人の男の子を生まれさせることが出来ないという方が、おかしいことになります。御子の誕生は、単に人間が生まれる事とは異なる特別な誕生でした。深い御心の中で、神が救い主の誕生を特別な方法で備えられたことは、極めて自然なことではないでしょうか。

神の御子がこの世に来られたのも (処女降誕)、またこの世を去られたのも (復活・昇天)、超自然的な力によるものでした。御子に関するこの始まりと終わりの出来事は、共に大切な意義を持ちます。聖書は、偉大な教師が生まれたと言うのではなく、人の知恵と理解を越える存在として、人となられた神、私たちと共におられる神、驚くべきインマヌエルであるお方の誕生の出来事を、事実として伝えているのです。

とりわけ、処女降誕は、純潔と聖潔の象徴としてきよい神聖なお方として生まれられたことを強調しています。罪から人を救うには、どうしてもきよさが必要なのです。

三、罪からの救い主としての誕生 (21)

預言された救い主の誕生も、処女を通しての特別なきよいお生まれも、そのお方が特別な働きをなすお方であることを示唆しています。それは、この方こそ、罪からの救い主であられるということです。

このお方は、イエスと名づけられました。イエスとは、普通の名前であるヨシユアをギリシャ語で表現したもので、語源的に「主は救い」という意味です。つまり、「おのれの民をそのもろもろの罪から救う」お方なのです。ルカによる福音書には、「あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」(ルカ2・11)とあります。彼は、いと高き神の子でありながら、私たちが罪から救うために人間の弱さを思いやることができる真の人間として生まれ、罪を知らないまま十字架にかかり、復活してその大能の力を現されました。彼は、罪人を救うために来られたのです。神はわれらと共にいます。しかも、われわれを罪から救うために共にいます。

結論

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった」と、キリストの誕生の一つ一つの出来事の中に、私たちのために生まれたお方の驚くべき救いが明らかにされています。このような救い主をもう一度、心に深く思い巡らし、喜び、感謝してお迎えしましょう。

研究資料

(中島啓)

テキスト

18 イエス・キリストの誕生の次第

「誕生」は〔ギ〕ゲネシス（他に起源、家系などの意も）。ちなみに1節の「系図」はその〔ギ〕ゲネシスの「書」〔ギ〕ピブロス。その系図（1〜17）の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。婚姻 いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係（夫、妻という表現はそのため）。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に一年ほどの婚姻期間を経て正式な結婚へと進んだ。その間に女性が他の男性と関係を持てば姦淫と見なされた（申命記22・23以下）。一緒にならない前に 正式な結婚へと進む前。聖霊によって身重になった 神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。むしろ1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシス（創世記の意も）が象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリヤの胎内にあらわされたということ。世界の創造のときと同じように、新創造（すなわち救いのわざ）に際しても聖霊が働かれるのである。

19 正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず 「正しい」〔ギ〕ディカイオス

は律法に対する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリヤの姦淫の容疑を世に明かし、彼女は裁きと処罰を受けねばならない（石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである）。ヨセフはマリヤをさらし者にしたくなかった。とはいえ、明らかに有罪

と思われるマリヤを妻に迎えるならば義が通らない。その葛藤の中で到達した答が、ひそかに離縁

すること。マリヤの同意さえあれば一人の証人の前で公式に離縁することが可能であったのである。このようなヨセフの葛藤の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、慈しみに富んだ隣人に対する優しさとを同時に示すものであった。

20 ダビデの子ヨセフ 新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけ。

21 その名をイエスと名づけなさい イエス〔ギ〕イエス（ヘ）イエシュア（ヨシユアの短縮形）のギリシャ語読み。おのれの民をそのもろもの罪から救う者となる その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は、政治的な救いであった。しかしイエスがもたらす救いはそのもろもの罪からの救いなのである。

22 主が預言者によって言われたことの成就するため 神が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシヤ預言には、それが第一義的に指し示すもの（ここでは、アハズに語られた当座の救い）と、究極的に指し示すものがある。その究極的な約束が、今まさに成就するのである。

23 おとめがみこもって 〔ギ〕パルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の〔ヘ〕アルマは「若い女性」の意。よってこの預言は処女降誕を意味するのではないと主張する者もあるが、その預言の究極の意味での成就を記すこの箇所〔ギ〕パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によると断言され（18、20）、さらにマリヤも「まだ夫がありません（直訳は、男の人を知りません）」（ルカ1・34）と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはっきりと指し示すものであると受け止めるのは、当然である。インマヌエル 個人的な名ではなく、その役割を説明する称号的なもの。神の御子が人となることによって「神われらと共にいます」という主の臨在が実現する。そしてイエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章でインマヌエルという名を伝えるこの書が、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（28・20）との約束で終わるのは偶然ではない。

25 子が生れるまでは、彼女を知ることにはなかった 「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いないものとする。なお、聖霊による受胎（18、20）の「くによる」を表す前置詞〔ギ〕エクは、1〜17節の系図においても、「ボアズはルツによるオベデの父」（5）のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことは決してない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

参考図書 注解書 D.H.Hagner (Word), D.H.II (New Century Bible), 96他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書
タイトル
暗唱聖句

マタイ1・18〜25

彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。

マタイ1・21

目 標

キリストを罪からの救い主と信じる

導入

(水野)

今年もクリスマスをお待ち「アドベント」を迎えました。アドベントはイエス様のお誕生日を、わくわくしながら、準備するすばらしい時です。今年のクリスマスには、たくさんのお友だちを誘いたいですね。お友だちにイエス様を紹介するためにも、アドベントの礼拝で、イエス様のことをもっと深く学びましょう。

約束されていた誕生

みんなの中に、何年も前から生まれてくることわかっていた人、いますか？ いまねえね。だれ一人として、生まれてくることは知らされていません。ところがイエス様がお生まれになることについては何千年も前から、預言されていました。昆虫学者のファールさんは、アリが一生懸命食べ物運んでいるのを見て、アリの通っている道より、早く安全な道があることを知らせたいと思いました。どんなに説明しても通じません。アリになってアリ語で話せたらいいのですが？

人間も、神様の目から見たら、ハラハラドキドキさせるようなことばかりしています。人間を救うためには神様が人間となってきてくださる以外ないのです。そこで、神様は預言者イザヤさんに

救い主が生まれること、男の子で、「インマヌエル」と呼ばれると告げられました。神様が人間の中に来てくださるという約束でした。

お父さんとお母さんはだれ？

神様であるイエス様が人間として生まれるために、神様はマリヤさんをお母さんとして選ばれました。マリヤさんはヨセフさんと婚約していましたが、まだ結婚していませんでした。マリヤさんは神様の不思議な力により赤ちゃんが与えられました。きよい神様が人間の赤ちゃんとして生まれるための、神様の御業でした。

婚約者のヨセフさんは正しい人でしたから、マリヤさんのお腹に赤ちゃんがいることを知って、とても苦しみ悩みました。結婚もしていない人に赤ちゃんができることが知れると、ユダヤの国では、石で打たれる恐ろしい刑罰を受けることになりました。マリヤさんのことを愛していたヨセフさんは、ひそかにマリヤさんとの婚約をやめようと思いました。

そのヨセフさんのもとに夢で天使が現れ、「その胎内に宿っているものは聖霊によるのである」と、神様から与えられた赤ちゃんであることが伝えられました。ヨセフさんは「インマヌエル、神われらと共にいます」の預言を通して、神様が私たちといつも一緒にいてくださるために人間となられることを知りました。だから、マリヤさんのお腹の子は神の子であると信じました。そして、マリヤさんと結婚しました。神様は、どんなことがあっても神様を信じて従おうとするヨセフさんとマリヤさんを、イエス様のお父さん、お母さん選ばれたのです。

罪からの救い主イエス様

赤ちゃんが生まれると名前を付けますね。みんなもいい名前をつけてもらっているでしょう。どんな名前の意味があるか聞いていますか？

マリヤさんとヨセフさんは、天使によつて、生まれてくる赤ちゃんの名前を「イエス」と付けなさいと、命じられました。名前の意味は「主は救い」という意味です。天使は、「彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救うことになるからである」と、イエス様が来られた目的も伝えました。

イエス様が人間となつて来られることは、昔から預言されていたことでした。また、おとめであるマリヤさんからお生まれになることも、イエス様が特別な働きをするための神様の計画でした。

それは、生まれながらに、罪のバイ菌によつて汚染されている私たちを、救い出し、神の子どもにしてくださるためです。イエス様が人間となられたことは、私たちがゴキブリの中に生まれるよりもっと汚いところに来たのです。私たちと同じようにお腹もすくし、苦しみや弱さを経験されました。しかし罪を犯すことなく、私たちの身代わりとなつて、十字架にかかつて死なれ、罪から救ってくださいました。そして死からよみがえって、神様ご自身であることを現してくださいました。

まとめ

クリスマスってすごい日ですね。クリスマスが私のクリスマスになるために、イエス様が私の罪のために来てくださったことを信じましょう。イエス様が共にいてくださるなら、毎日がクリスマスです。この恵みを伝えましょう。

♪主イエス様いつも私とインマヌエル♪

(プレイスワールド8)



聖書 ルカ2・1〜20

テーマ 救い主を心に

序論

(福井)

この箇所は、よく知られているイエス誕生の物語です。主はこの世の豪華絢爛な場所ではなく、家畜小屋でお生まれになりました。しかも、このイエスの誕生を最初に知らされたのは貧しい羊飼いたちでした(8)。これが歴史的な事実です。この事実から、キリストを私の心にお迎えする恵みに与りたいと願います。

一、ベツレヘムへの旅

1節に「全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た」とあります。当時の全世界とはローマ帝国全域で、人々は皇帝を「王」と呼び、「神」と崇めました。皇帝アウグストは領土の面積と人民の数を正確に知るために、また徴兵と徴税のために、人口調査の勅令を出したのです。ただしユダヤ人は、兵役を免除されていたので、課税目的の調査がパレスチナで行われませんでした。人々は登録するためにそれぞれの生れ故郷に帰りました。マリヤとヨセフも、ナザレからヨセフの先祖の町ベツレヘムに向いました。その道程は百五十キロで約四日間の旅でした。身重のマリヤはるばに乗り、ヨセフはその傍らでろばを引いて歩きました。二人は星は太陽の下、夜は寒々とした星の下を旅し、ある時は大樹の木陰で毛布にくるまって眠りました。その彼らがベツレヘムに滞在している間に、イエスがお生まれになりました。

それは救い主がベツレヘムで、ダビデの家系から生れるという預言の成就でした(ミカ5・2)。

二、飼葉おけの中に

マリヤとヨセフはエルサレムに着きましたが、町は込み合っていて、宿泊する宿屋がなく、結局彼らが落ち着いた場所は、家畜小屋でした。そこで「マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせ」ました。イエスは人間扱いではなく、半ば動物扱いであったと言っても過言ではありません。真新しい産着ではなく、ありあわせの布でくるまれたのです。

イエスがお生まれになった夜、主の御使いが、羊飼いに現れ、「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである」、あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう」と告げたのです。その貧しく、無学で軽蔑されていた羊飼いたちは、ベツレヘムに出かけ、幼子イエスにお会いしました。

使徒パウロは、「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」(Ⅱコリント8・9)と言いました。しかも、主イエスは「十字架の死に至るまで従順であられ」(ピリピ2・8)しました。そのイエスの謙卑と従順により私たちのための贖いが成就したのです。

三、救い主を心に

イエスが飼葉おけの中にお生まれになったのは

(客間には彼らのいる余地がなかったからである)と聖書は記します。人の心は何とつれなく、冷酷そのものでしょうか。裏金を使えば客間の片隅でも用意されたかも知れません。宿屋の主人にあわれみの心の片鱗でもあれば、身重のマリヤを何とか処遇できたのと思われまます。

「最初キリストが私たちの間に来られた時、私たちは彼を町外れの家畜小屋の中に押し入れた。それ以来、私たちはそこに入れておこうと懸命になつてゐる」と言つた人がいます。私たちの心にはイエスのいる余地はあるでしょうか。私たちは心の王座にイエスを迎えているでしょうか。イエスの居場所がなくなつてはいないでしょうか。せっかく、御子が御降誕くださり、偉大な救いの恵みをもつてきてくださったても、もしその主を私たちが心にお迎えしなければ、その恵みは生かされません。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった」(ヨハネ1・9〜11)。「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ1・12)。

結論

クリスマスは御子のご降誕を祝う日です。しかし、御子をお迎えした者だけが、真にそのご降誕を祝い、感謝し喜ぶことができるのです。今も、心を開いてイエスを受け入れるならば、飼葉おけのような卑しい者の心の中にも、来て住んでくださるのです(黙示録3・20)。信仰によって明確にイエス・キリストをお迎えしましょう。

研究資料

(井上)

先週からアドベントを迎えている。イエスの誕生の場面を伝える聖書箇所である。

テキスト

- 1 **全世界の人口調査** 全世界を直訳すると、人の住んでいるすべての世界となる。ローマ帝国全域と言えよう。ルカは本章と使徒行伝5:37にクレニオがシリヤの総督であった時代に二回の人口調査があったことを記している。**勅令**(㊦)ドグマ後に教義を指すようになるドグマである。公式のという意味合いが込められている。**皇帝**(㊦)カエサル) ユリウス・カエサルと養子のアウグストゥスの姓であったが、皇帝の称号となった。**アウグスト** ローマ帝国初代皇帝、在位は紀元前二十七年から紀元後十四年。ローマの元老院が死後に贈った称号であり、崇敬に価するという意味である。
- 3 **人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った** 人口調査のために、先祖の地に帰るという慣習は、ローマの行政には無いとされる。人口調査の実際はそれぞれの国の習慣によってなされた。旧約以来、部族ごとに人口調査をしたユダヤの伝統にのっとって行なわれた。
- 4 **家系**(㊦)オイコス) 文字どおりには「家」である。家に集る「家族」を指すようになり、さらに意味が広がり「家系」となった。**血統**(㊦)パトリア) 家系と同意語であるが、より狭い、厳密な意味で用いられる。ヨセフがダビデの家系であったことが明記されている。救い主がやがてダビデの子孫から生まれるという預言の成就である。**ベツレヘム** パ

- ンの家の意味。エルサレムから南七kmの丘陵にある。ダビデの出生地であり、イエス降誕の地となった。当時の人口は九百人位であったと言われる。
- 5 **いいなづけ** 婚約は結婚にも等しい重みがあった。マリヤは婚約者ではあったが、妻と同じ扱いでヨセフと共にベツレヘムに向かった。
- 7 **初子を産み** ただの子ではなく、初子と記されている。この語からマリヤには、後に生まれた子があると考えるのが普通であろう。やがてヨセフとの間に、イエスの弟妹となる子が与えられた。**布にくるんで** この語の主語はマリヤである。彼女は最初の出産にも関わらず、ヨセフ以外の助けは得られなかった。自分の手で生まれたばかりの嬰兒を外界から守った。**飼葉おけ**(㊦)ファテイン) 飼葉おけには石で作られたものもあったが、この語は木のおけを指している。**客間**(㊦)カタルーム) 多くは宿屋とも訳される。
- 8 **羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた** 約千年前にダビデも同じベツレヘムの野で羊飼いであった。真冬の十二月に、羊飼いが野宿をして放牧の羊の番をすることは疑問視されてきたが、このことを全く否定する論拠は乏しい。
- 9 **主の栄光** 旧約において神の栄光は、嵐、噴火など異象を通して表された。栄光は会見の幕屋に満ち、エルサレムの神殿にも満ちた。新約において神の栄光はイエスを通して表された。羊飼いをめぐり照らした栄光は、多分に旧約的である。**彼らは非常に恐れた** 直訳するなら、彼らは大きな恐れを恐れたとなる。恐れが強調されている。
- 10 **恐れるな** 天使は羊飼いに対して、ザカリ

ヤ(1:13)、マリヤ(1:30)と同じく語りかける。神の顕現の前に恐れを抱くことは当然であり、敬虔な思いの表れでもある。

- 11 **救主**(㊦)ソウテル) ギリシヤ、ローマでは王を指しても用いられる。新約聖書では、神とイエスのみに用いられ、決して人には使われない。**主**(㊦)キュリオス) 一般には主人、目上の人に用いられる。イエスの神性を表す言葉として用いられている。主という概念には、創造者、支配者という意味合いがある。**キリスト**(㊦)クリストス) 油注がれた者の意味。祭司、王、救い主(メシヤ)に用いられた。定冠詞が付けられると、救い主イエス・キリストに限定されて用いられる。

- 12 **幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてある** 全知全能のお方、創造者、永遠性・遍在性を持つ方が、何もできない嬰兒として生まれた。神の謙遜(けんそん)、愛、慈しみの深さを覚える。

- 14 **いと高きところでは、神に栄光があるように** ラテン語で「グロリア イン エクセルシス デオ」となる。クリスマスに関わる賛美には、マリヤの頌歌マグニフィカート(1:46以下)を始めとしてラテン語の呼び名が有名である。

- 18 **不思議に思った**(㊦)サウマゾー) 驚いたという感嘆が込められている。怪しむというような意味合いはあまりない。

- 19 **心に留めて、思いめぐらしていた** マリヤの思慮深い性格がうかがえる。神はマリヤの信仰と人格に、救い主の成長を託されたのである。

参考図書 Norval Geldenhuys (NICNT, EERD—MANS) 他

聖書
タイトル
暗唱聖句

ルカ2・1〜20

うれしいビッグニュース

きょうダビデの町に、あなたが
のために救主がお生れになっ
た。

ルカ2・11

目 標
救い主として生まれてくださっ
た主を心にお迎えする者となる。

導入

(松浦み)

アドベントクランツに二本のろうそくが灯りま
したね。皆さんは、二〇一〇年十月に国勢調査が
行われたことを知っていますか？ 前回は二〇〇
五年でした。日本では五年に一度国勢調査をして
人口を調べたり、職業や子どもの状況などを調べ
て国づくりのために役立てるのです。今から二千
年前のイスラエルの国でも同じように人口調査が
行われていました。ヘエー。びっくりですね。で
も、ほんとの話で歴史的事実です。日本では国勢
調査員が一軒一軒回って調査しますが、二千年前
はどんなふうにしたのでしょうかね。

人口調査

そのころ、イスラエルの国を治めていたのは、
ローマ皇帝アウグストでした。皇帝は広い領地を
治めていたので、税金を集めるための基礎とする
ため、人口調査をするように命令を出しました。
その命令はこうでした。「すべての住民は、自分
の先祖の生まれ故郷に帰って住民登録をせよ」。大変
なことですよ。ところで皆さんは自分の先祖がど
んな人だったのか考えたことがありますか。今フィギ
アスケートで活躍している織田信成君は、安土・桃

山時代（一五七三年）室町幕府を滅ぼした織田信長
の十七代目の子孫だといわれています。そんな前
のことわかる人はそういませんが、大工のヨセフは、
イスラエルの王ダビデの血統で、二十七代目の子孫
でした。ですから婚約中のマリヤと共に、ダビデ
の故郷ベツレヘムに旅することとなりました。

旅先での赤ちゃん誕生

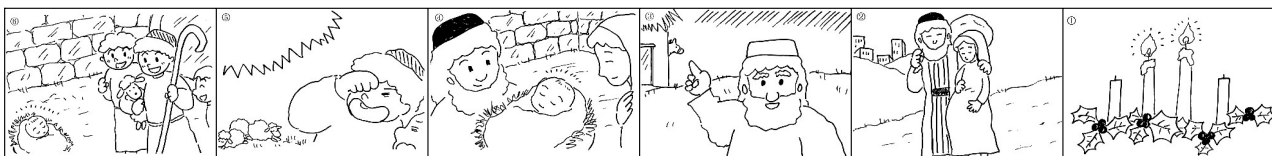
マリヤのお腹には赤ちゃんがいました。ヨセフ
の住むナザレからベツレヘムまでは百二十kmほど
もあり（名古屋から大津あたり）、ヨセフは身重の
マリヤをいたわりながら何日も歩いてやっとベツ
レヘムに着きました。ところが宿屋はどこも満員
です。ヨセフは何とかマリヤを休ませなくてはと、
必死で宿屋の戸をたたきます。トントン、「ごめん
ください。今晚とめてください」、「せつかくだが
悪いねえ。今夜はお客がいっぱいで一部屋も空い
ていないんだよ」。ヨセフは、あきらめずに探しま
す。トントン、「ダメダメ。満員だよ！」途方にく
れていると親切な人が声をかけてくれました。「お
困りでしょう。家畜小屋でもよければ、どうぞ」
と案内してくれました。「ありがとうございますわ」。
マリヤは大きなお腹をさすりながら、ほっとした
思いで家畜小屋に泊まることになりました。その
夜のことで、「オギヤア！オギヤア！」マリヤ
は元気な男の子を生みました。ヨセフとマリヤの
二人は大喜びで、赤ちゃんを布でくるみ、家畜の
えさを入れる飼葉桶かいはづの中に寝かせました。赤ちゃん
はわらの中においの中でやすやすと眠っています。

羊飼いのビッグニュース

その晩、ベツレヘムの近くの野原では羊飼いた

ちが野宿して羊の番をしていました。焚き火に当
たりながら、「ふあー、眠いなあ」、「今晩は冷え込
むねえ」と口々に言いながら、夜の闇じゅう羊を
守っています。その時、突然パアツと光が差し
ました。「きやあー！」「こわいよお！」羊飼いた
ちはびっくりしてぶるぶる震えています。すると主
のみ使いが現われ、言いました。「怖がらなくても
大丈夫です。ビッグニュースを伝えるにきたのです。
きょう、ダビデの町に、あなたがたのために救い
主がお生まれになりました。この方こそ主なるキ
リストです。その赤ちゃんは、布にくるまって飼
葉桶に寝かされています。それがしるしです」。み
使いの言葉に目をパチクリさせていると、空一面
に大勢のみ使いがあらわれ、神を賛美しました。「い
と高きところでは、神に栄光があるように。地
の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。
み使いたちが天に帰った時、羊飼いたちは顔を見
合わせ、「夢じゃないよね」、「救い主がお生まれに
なったんだ」、「ダビデの町ってベツレヘムだよね」。
「さあ、行こう！」羊飼いたちは急いで走って行
き、ついに赤ちゃんに出会いました。み使いが言
ったとおり、布にくるまれ、飼葉桶の中ですよ
う眠っていました。「なんてかわいいうちの赤ちゃんだ
ろー！」羊飼いたちは心から神様をほめたたえ、救
い主にお目にかかったことを喜びながら帰ってい
きました。このすばらしいニュースは、真つ先に
名も無い羊飼いに伝えられました。知らせを聞い
て急いで行った人々のように、素直な心で救い主
を待ち望みましょう。

♪世界で初めのクリスマス♪（友よ歌おう14）



聖書 ヨハネ1:1〜5、9〜14 テーマ すべての人を照らす光

序論

(福井)

クリスマスの夜、大きな星がひときわ輝いたという出来事は、私たちに心温まる思いを与えてくれます。ヨハネは、福音書の冒頭で「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」と、キリストの誕生を紹介しています。この光であるキリストを信じ受け入れるとき、私たちは新生し、神の子とされるのです。

一、いのちなるキリスト

ヨハネは、キリストのことを〈初めに言があつた〉と、「キリスト」と言わないで、「言」と表現しました。当時、すでにキリスト教がユダヤ人の間だけでなく、異邦人の間にも広がっていました。ですから、彼らには、「言」すなわち「ロゴス」の方がよく理解できたのです。

この「言」であるキリストは、〈初め〉から存在されたお方でした。それは、時間の最初、歴史の最初という意味ではありません。時間が始まる以前、つまり創造のみわざを開始されたその時からご存在されたお方でした(3)。このキリストは〈神と共にあつた〉お方です。すなわち、キリストは永遠の神であり、父なる神と永遠の交わりの中におられたお方なのです。

〈この言に命があつた〉とは、単なる法則や原理のようなものではありません。この命は、肉体的命、霊的な命、永遠の命です。キリストを信じ

るとき、命が与えられ、死から命へ移されます(ヨハネ5:24)。〈そしてこの命は人の光^{やみ}でした。〈やみはこれに勝たなかった〉のです。闇の中に光が差し込んでくると、闇は姿を消します。しかし、光の中に、闇は入ることはできません。闇が光を駆逐することはできないのです。

二、光なるキリスト

〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた〉とあります。キリストの来臨は、私たちに神を現わし、啓示するためでした。光は物を照らして見えるようにします。そのように、光なるキリストによって、心の目が開かれて、彼を通して、神がはつきりわかるようになるのです。

また、キリストは、闇の中にいる者に光を与えます。ヨハネによる福音書には、光を与えたイエスの業が二つ記されています。その一つは「罪を赦された姦淫の女」(8章)のことで、もう一つは「光を与えられた盲人」(9章)の出来事です。

「姦淫の女」の話は、二重の意味で人間の暗黒を表しています。一つはイエスと女を訴えている群衆で、彼らは自分の罪を棚にあげて、ただ訴えているのです。もう一つの暗さは、罪を犯した女です。彼女は自分の罪が白日の下にさらされて、身の置きどころもなかったと思います。しかし、キリストは彼女に「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい」(8:11)と言われました。キリストの十字架は、今も信じる者の心に、どんな罪も赦される、闇に打ち勝った光として輝いています(5)。

三、キリストを受け入れる者の特権

〈まことの光〉の、〈まことの〉という言葉は、ギリシャ語では「アレーシノス」で、「真実な」とか「本当の」という意味です。キリストは、暗黒の世界に輝く唯一本当の光として来られました。しかし、この世の人々はキリストがこの世に来られた時、キリストを認めることができませんでした。それは、人間が罪を犯し神から離れているため、キリストを認められなかったのです。別の言い方をすれば、霊的に盲目な人は、偏見をもっていて、真理に敵対してしまうのです。

ですから、キリストが〈自分のところ〉に来られたのに、ご自分の民は受け入れませんでした。ここで〈自分のところ〉とは「ご自分の国」のことで、イスラエルのことです。それで、イスラエルの民はキリストを信じることなく、十字架につけて殺してしまいました(マタイ21:33〜40)。

〈しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである〉。(力)とは特権(新改訳)、資格(新共同訳)の意味です。たといだれであつても、謙虚にキリストを知り、この世界の主、また自分の救い主として受け入れる人は、神が恵みによって、神の子どもとしての特権を与えてくださいます。

結論

イエス・キリストは、すべてを照らす光としてこの世に来てくださいました。彼は神を現わし、それだけでなく罪を赦し救い、神の子となる特権を与えてくださるのです。

研究資料

(井上)

ヨハネが記す神が人となられた受肉、イエスの降誕である。ヨハネの筆致は、簡潔で美しく、詩的である。

テキスト

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この書き出しに際して、ヨハネの念頭には天地創造の創世記1・1があつたであろう。ヨハネによる福音書の主題は人の新たな創造である。言(㊦)ロゴス) ヨハネはロゴスを普通の会話の言葉としても用い、イエスが語った言葉、神の言葉としても用いている。さらに重要なこととして、ロゴスはイエスそのものである。イエスは受肉した言葉であることをヨハネは独自に述べている。「初めに」という語はイエスの永遠性、すべての前にすでに存在されていた先在性を表している。1節後半は、イエスが神であること、父なる神との人格的な交わりを持つことを記している。ヨハネはロゴスという独自の表現で、キリスト論の根本を最初に提示している。早くも一世紀には、正統的なキリスト論をくつがえすグノーシス派の異端が入り込もうとしていた。今に至るまで異端的なキリスト観は現れ、また消えていく。

3 すべてのものは、これによってできた 創造者は父なる神であると考えがちであるが、イエスとの共働でなされた。神は「光あれ」との言葉を最初に、言葉によって創造の業をなされている。全宇宙は神の言葉であるロゴス、イエスによって創造された。イエスは創造者であり、全宇宙の主

権、統治、支配をお持ちのお方である。

4 この言に命があった 命(㊦)ゾウエ) 新約聖書で命と訳される語は、ゾウエとプシユケーに大別される。双方共に、様々な意味を持つているが、地上の命を越えた、永遠にいたる神からの命はゾウエに含まれている。イエスは神からの命を持ち、人に分かち与えるお方である。イエスが霊的な命の源泉である。ヨハネは神からの命を巡って、この福音書を記している。この命は人の光であった。光(㊦)フォウス) 聖書は神の栄光の輝きを記す。光は神の本質である。神は光を照らし、光を示すお方である。イエスは光としてこの世に来てくださり、光に従う者に神からの命を与えて、光に生きる者としてくださる。

5 光はやみの中に輝いている ヨハネは霊的な意味合いでのやみを語る。神と離れるならば、やみは深くなる。罪は暗やみに属し、悪の力はやみの力である。やみはこれに勝たなかった イエスの光は、どんなに深く、濃いやみをも照らす神の光、命の光である。

9 すべての人を照すまことの光 まこと(㊦)アレセイア) 真実とも訳される。人についても用いられるが神の本性として多く用いられる。すべての人を照す イエスは全人類を照らす光である。イエスの光は十分であるが、残念なことに光に背を向け、光よりも闇を愛する者もいる。

10 彼は世にいた… 世は彼を知らずにいた イエスがクリスマスにこの世に生まれる以前に、人の目には見えないが世におられたことを示す。もし人が創造された世界、万物の秩序と支配に心を

向けるならイエスを知ることができた。

11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった イスラエルの民は神に選ばれ、律法が与えられ、恵みの約束の内にあつた。預言の成就として、ユダヤに救い主イエスは生まれた。イスラエルの民はイエスを信じることなく、拒み、十字架に付けた。

12 彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々 「自発的、意志的にイエスを信じる者ならだれでも」という意味である。受け入れることは信じること、信じることは受け入れることである。神の子となる力 力(㊦)エゾウシア) 本来、力と訳されるべきではない。特権(新改訳)、資格(共同訳)の方が正確である。神の子とする力ではなく、神の子とされる特権が語られている。

13 血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず 先祖にだれかを持つということではない。人間的な力でも、努力でもない。ただ神への信仰によって、新生の恵みに与るのである。

14 言は肉体となり 神の言葉である方が、罪以外は、すべてにおいて私たちと同様の人となった。神であり、人である唯一のお方である。宿った(㊦)スケノー) 本来、天幕を張るという意味である。他にヨハネ黙示録で四箇所用いられている。わたしたちはその栄光を見た イエスは多くの奇跡をなしたが、特にヨハネが見た山上の変貌をさすのであろう。めぐみとまことに満ちていた イエスは律法を越えた、恵みの福音という真理を表された。

参考図書 Leon Morris (NICNT, EERDMAN'S), Beasley-Murray (WBC, WORD) 他

聖書 ヨハネ1・1～5、9～14
タイトル 心を照らしてくださるイエス様
暗唱聖句 すべての人を照らすことの光があつて、世にきた。ヨハネ1・9
目 標 光なるキリストを信じ受け入れる。

導入

(松浦み)

ろうそくの火が三本灯りました。この時期になると、教会でも、町でも、ぴかぴか光る飾り付けをします。あなたのお家でもきれいに飾っているかもしれませんね。最近はいびつくりするような光のアートに出くわすことがあります。まるで真昼のように明るく周りを照らし出しています。また、工事現場の光は小さいですが、赤いランプがぴかぴか光って、工事中であることを教えてくれます。光というのは、暗闇を照らし出したり、私たちを危険から守り、行く道筋を示したりします。

神の言なるイエス様

聖書の一番初めには、この世界の初めにあったものが書かれています。何があつたと思いますか？「闇」だけがありました。その闇にむかつて、神が「光あれ！」と言われると光ができました。神の言葉が発せられて、この世が創造されたのです。「初めに言があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。この言は初めに神と共にあつた。すべてのものは、これによつてできた」。この「言」とはイエス様ご自身をさします。この「言」の箇所にイエス様を当てはめて読んでみましょう。「初めにイエス様があつた。イエス様は神と共にあつた。イエス様は神であつた」とね。ほら、よく理

解できるでしょう。神の言葉であるイエス様は天地創造の初めからおられて、この世を造られました。それだけではなく、ご自分の内に永遠の命をもっておられ、この命は人の光でした。イエス様は闇の中で輝き、罪と不信仰のこの世を明るく照らし、人のいくべき道を指し示す方なのです。

闇の中に輝く光

このように、クリスマスに誕生してくださったイエス様は、暗い世界に光としてきてくださったのです。

今から二〇一〇年前の世界と人々の様子はどんなだったでしょう。ダビデ王によつて築かれたイスラエル王国は真の神様を信じ敬う国でした。しかし、いつの間にか人々は神様を信じることをやめ、自分勝手な生活を始めたのです。その結果、国は滅ぼされ、大国の支配の中で、夢も希望もない生活を送っていました。マラキという預言者が神様からのメッセージを伝えて後、久しく預言も止み、人々はますます闇の世で過ごしていたのです。そのような暗黒の時代が四百年間も続いたのです。やがて神様のご計画の時が満ち、神様は深い憐れみを持ってひとり子イエス様をこの世にお遣わしになりました。この方は闇の中に輝く光として世に遣わされました。

先ほど神の言葉であるイエス様のことを聞きましたね。イエス様は「神のことば」です。「ことば」を辞書で調べると、人々が思想、意思、感情などを伝え合うためのものと記されています。つまり、神様は目に見えないお方ですから、神様の思想、意思、感情は人には伝わりません。神様は言葉として遣わされたイエス様を通して、神様の考えや

意思、気持ちを人々に明らかにするようされたのです。イエス様は人となられた神ご自身です。

すべての人を照らす光

このイエス様は、すべての人を照らす光です。光は闇を照らし、隠れた罪を暴きます。また、隠れてなされた善も明らかにされますね。イエス様は光としてこの世に生まれ、地上の生活をされました。そして世の光として、人々の罪を赦し、病を癒し、涙をふき取ってください。生きて希望を与えてくださいました。最期には十字架にかかつて死んでくださり、救いの道を開いてくださいました。その生涯を通して、神様がどんなにめぐみとまことに満ちたお方かを見せてくださいました。でも、このすばらしいイエス様が来てくださった時、人々は救い主とは気が付きませんでしたし、光のもとに来ようとしませんでした。

もし、あなたが外から帰った時、家に鍵がかかっていて、中に入れない時、家に鍵がかかっていて、中に入れないのは情けないし、寂しいですね。イエス様がこの世に来てくださった時、人々の心は鍵がかかっているようで、喜んでお迎えした人は、だれもいませんでした。

あなたの心には鍵がかかっていませんか。神様は、イエス様を喜んでお迎えする人、その名を信じた人々には神の子となる特権が与えられると約束されました。さあ、あなたの心の真ん中にイエス様をお迎えしましょう。「イエス様どうぞ私の心にお入りください。私の救い主となってください」と。これがイエス様の一番喜んでくださるクリスマス待つかたひです。

♪ひかりひかり♪(教会学校せいか108)



聖書 ヨハネ3・16～18 テーマ 神のプレゼント

序論

(福井)

今日の聖書箇所は、福音書の要約であり、聖書の真理がこれに集約されています。ここに聖書の中の聖書と呼ばれる16節が含まれています。その16節を要約すれば、「救い主キリストを神からのプレゼントとして信じ受け入れるなら、永遠の命を得ることができる」という約束なのです。

一、神は、世を愛された

「神は……この世を愛して下さった」と、神の愛の対象は「この世」です。「この世」とは神の選民イスラエルだけでなく、時代も民族も越えた全人類のことです。その「この世」は神に愛されるだけの価値があったのでしょうか。まったくありませんでした。なぜなら、神を知らず、いやむしろ神を否定し、無視し、背を向け、信じない世界が「この世」だからです。神を否定し、信じない人間は、神の代わりに、被造物を神と崇める者となり、自己中心性となって表れるのです。

その結果、具体的な罪を犯す者となりました(マルコ7・20～23、ローマ1・28～32)。人は罪を犯すので罪人なのではなく、生まれながらの罪人なので罪を犯すのです。ですから、「この世」は「罪の世」であり、「汚れた世」です。その「この世」を、それにもかかわらず、神は愛してくださったのです。ここに無条件の愛を見ます。人間の愛は「もし……ならば」の条件付きの愛です。しかし、

神の愛は、「にもかかわらず」の、無条件で絶対的な愛です。ですから、この神の愛の対象から漏れる人は一人もいません。

二、ひとり子を賜ったほどに

神は無条件の絶対的な愛で「この世」を愛されたのです。それは人が神から離れていても、神に敵対する者であっても、変わることなく愛することです。さらに驚くべきことは、「神はそのひとり子を賜わったほどに」愛してくださったのです。この「賜わる」という言葉は、殿様が家来にご褒美を与えるような意味にとられますが、これは実は「お捨てになった」ということなのです。それは、「賜る」のギリシャ語「パラダイドナイ」には、「放棄する」という意味があるからです。つまり、「神はひとり子をお捨てになったほどにこの世を愛して下さった」ということなのです。神は愛の対象、喜びの源であるひとり子イエスを犠牲にまで、「この世」を愛されたのです。

そのイエスが、「モーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」(14)と語られました。これは、明らかに十字架のことを意味しています。ですから、神がひとり子をお捨てになった犠牲とは、イエス・キリストの十字架のことです。神は、一つの罪も少しの汚れもないお方、捨てられる理由の全くないひとり子を十字架におかけになるほどに、この世を愛されたのです。

三、御子を信じる

神はなぜ、それほどまでのことをされたのでしょうか。ひとり子を十字架にかけるほど、世、すなわち私たちを愛してくださった、その愛は私たちに何をもたらしたのでしょうか。それは、

①永遠の滅びからの救いです。永遠の滅びとは、永遠の刑罰です。その世界は神との交わりのない世界、愛の温度の一度もない、慰めのかけらもない世界、一筋の光さえない暗黒の世界、それが永遠の滅びです。この永遠の滅びは、確実に、すべての人に来ます。しかし、イエス・キリストの十字架の救いは、この滅びから私たちを救います。

②永遠の命への救いです。永遠の命とは、ただ単に寿命がいつまでも続くというのではありません。死に打ち勝つ命であり、全く質の違う、永遠に神のもとにあり続ける人生に導き入れてくれる命です。それは、イエス・キリストの復活と同じ復活にあずかることです。

その命を得て自分のものとするために必要なことは、悔い改めと信仰です。①心の罪、言葉の罪、行いのあやまちでも、正直に認めて神に告白することです(1ヨハネ1・9)。②もう一つは、イエス・キリストが自分に代わって死んでくださったことを信じることです(ローマ10・9)。

結論

神の愛のゆえに、キリストによって世界のすべての人々に救いの扉が開かれています。すなわち、救いは世界のすべての人々のために備えられています。それゆえ、この世の中のどんな人でも、キリストを信じ受け入れるなら救われるのです。

研究資料

(井上)

聖書の最高峰、聖書の中の聖書と呼ばれるヨハネ福音書3・16を含む文節である。イエスがニコデモに語られた直後に記されている。イエスが語った言葉の続きなのか、ヨハネの説明なのか問われる。ニコデモとの会話を受けて、ヨハネが救いについて記したと考えることが妥当であろう。

テキスト

16 神はそのひとり子を賜ったほどじ、この世を愛して下さった。ひとり子(キ)モノゲネース)形容詞であり、単数形の息子(キ)ウイオス)と共に一人という唯一性が、強調されて用いられている。英訳聖書(NIV)では、ワン・アンド・オンリー・サン(一人にして唯一の息子)と訳している。イエスが賜物として、この世に与えられたのは、神の愛の結果である。神の愛は、人が神から離れていても、敵であったとしても変わらなく愛される愛である(ローマ5・6〜8参照)。神の側から、一方的な愛としてイエスを送られた(ヨハネ4・10参照)。この世(キ)コスモス) 新約聖書中百八十五回用いられている。ヨハネ福音書に七十八回、ヨハネの手紙に二十四回、ヨハネの黙示録に三回、ヨハネは計八十四回この語を用いている。ヨハネはこの世についての詳細な考察を行なっている。この箇所、この世とは、時代も民族も越えた全人類を指している。神の愛に与れない人は一人もないということである。神に反する忌むべきこの世ではなく、神の慈しみによって救われるべきこの世である。御子を信じる者、信じる(キ)ピステ

ウオー) 現在分詞動態で記されている。イエスへの信仰は現在のみならず将来も信じ続けることである。人が持つ自発的、能動的、意思的な信仰であることが解る。滅びない 滅び(キ)アポルオウ) とは永遠の滅亡を指している。永遠の命との対比で記されていることが多い。この文脈で強調されるのは、永遠の滅びではなく、永遠の救いである。永遠の命 ヨハネ福音書の主題である。イエスによる救いにあるものは信仰によって現在すでに、死から命に移されている(5・24参照)。イエスによって与えられる神の命は、信じた時点より始まり、永遠に及ぶものである。

17 世につかわされた つかわす(キ)アポステロー)

ヨハネ福音書では、イエスが神から遣わされたと記す箇所が三十八箇所ある。イエスの使命が神からのものであることが示される。他の福音書に比べて特徴的である。世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。さばく(キ)クリノー) と訳された語は、広い意味を持つ言葉であるが、終末に不義に定めるとい意味も持つ。ユダヤ的思想ではメシヤは義をもつてさばくために来臨するという考えがあった。イエスがこの世に降誕されたのは、人をさばき、滅びに定めるためではない。16節では永遠の滅びではなく、永遠の命を持つために救いを備えられたことが語られている。本節ではイエスが人をさばくのではなく、人を救い、永遠の命に生かすために来られたことが記されている。しかし、再び来られる再臨のイエスには、義とさばきという面が強く表される。

18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。イエスを通して神を信じることと、信じないこととの差異は非常に大きい。信じる者はさばかれず、信じない者はさばかれる。そのさばきはすでになされていることが示されている。さばかれない イエスを信じる者はさばかれない。信仰によって義とされた義認の結果である。義認は十字架でなされたイエスのあがないを信じることに始まる。神は完全な罪の赦しを与えてくださり、罪の刑罰から解放してくださる。信じる者を義であると宣言され、新しい神からの命に生かしてくださる。さばきにおいては「さばかれない」のであるが、同時に積極的な生に導かれる。さばかれている(キ)クリノー) 完了形受動態で記されている。すでにさばきを受けており、なおさばきは継続している。イエスを信じないという決断と意思は、その人が生きている死んでいるという状態に関わらず、さばきに置かれ続けるのである。イエスを信じない者は生きていても、滅びの淵にあるのである。神のひとり子

名 名(キ)オノマ) 十戒にある神の名をみだりにとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にされた。ユダヤ思想では、名は単に区別のためにあるのではない。名は人格、力を宿すものとして受け止められた。イエスの御名は、イエスの性質、イエスの力を持つのである。イエスの名を信じることは、イエスのすべてを信じることである。

参考図書 Leon.Morris (NICNT.EERDMA NS), Beasley-Murray (WBC.WORD) 他

聖書

ヨハネ 3・16～18

タイトル

神様からの最高のプレゼント

暗唱聖句

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。

目 標

ヨハネ 3・16
救い主キリストを神からのプレゼントとして信じ受け入れる。

導入

(松浦み)

クリスマスおめでとうございます。四本のろうそくが灯りましたね。世界中でこの日を覚えてお祝いされますよ。さあ、私たちも心からお祝いをしましょう。

最高のプレゼント

皆さんの中でクリスマスプレゼントをもらった人はいますか？もらってない人も大丈夫！今日は神様からすべての人に最高のプレゼントが与えられる日ですよ。えっ、いったいどんなプレゼント？私たちは手にするものは、どんなに素晴らしいものでも古びたり、なくなったりします。しかし、神様からのプレゼントはいつまでも変わらなない、なくならない最高のプレゼントです。それは何だと思う？「かわいいい赤ちゃんです」。その赤ちゃんの名前はイエスと名付けられ、布にくるまってすやすや眠っています。なんてすてきなプレゼントでしょう。

神様の愛のあらわれ

なぜ、赤ちゃんのイエス様が、私たちにプレゼントされたのでしょうか。それは神様の大きな愛のあらわれなのです。

神様はこの世を創造され、最初の人アダムとエバ

をエデンの園に住まわせてくださいました。しかし彼らは、神様の命令に従わず、罪がこの世に入り込んできました。その時以来、人は生まれつき罪の性質をもつて生まれてくるようになりました。罪についていうのは、神様の方を向かないで、神様に背を向けて自分勝手に歩むことをさします。この罪を持ったままでいると、人は皆滅びに進んでしまうのです。ところが、神は、そういう罪深い「この世」を愛してくださったと記されています。「ふーん、なるほど。神様は世界中の人を愛してくださったのか。神様の愛はすばらしいな。でも、ぼくには関係ないや。」そう、思わないで、ちょっと、待ってください。関係ない人なんて、一人もいませんよ。神様の愛はあなた個人に、ここにいるお友だち一人ひとりに注がれているのですよ。「この世」のところにあなたの名前を入れて読んでみてください。「○○を愛してくださった」。ほら、神様が○○くん、あなたを愛してくださっていることがわかるでしょう。しかし、なかなかこの愛に気付く人がいません。でも神様は私たちを愛して「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ43・4)と、言ってくくださる方なのです。この大きな愛は、ひとり子イエス様を通して現されました。人間の赤ちゃんとなってこの世にきてくださったイエス様は、家畜小屋で生まれ、貧しい大工の子として育ちました。成長されたイエス様は、寝る暇もないほど忙しく、病氣の人を癒し、罪を赦し、孤独な人の友となつて、父なる神様の愛を示してくださいました。そして、最期は十字架にかかり人間の罪の身代わりとして死んでくださいました。これは神様のご計画でした。なぜ、罪のない方が十字架で死なねばならなかった

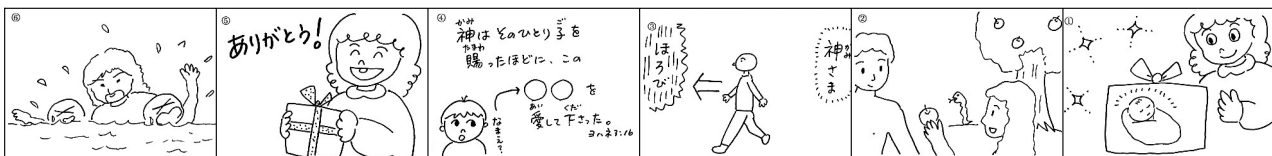
のでしょうか。それは、イエス様によってこの世が救われるためだったのです。「御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るため」なのです。このようにして、神様はイエス様によって私たちに對する愛を示してくださいましたのです。

この素晴らしい神様の愛のプレゼントを、「ありがとうございます！」と感謝していただきましょう。永遠の命は天国行きの切符です。どんなにたくさんお金を出しても手に入りません。信じて受け取るだけでしたら、最高のクリスマスプレゼントです。

例話

「るつちゃんの旅立ち」という本に、藤崎るつ記さんの実話が書かれています。るつ記さんは幼い時、ドイツの宣教師に出会いました。幼いながら、「私も大きくなったら外国の人々のために奉仕する人になろう」と決心し、小学校、中学、高校と、熱心に部活動をしたり、教会学校にも励みました。高3の時、自分の使命と進学を考え、受洗しました。大学で福祉を学び、アジアの貧しい国の人々に奉仕するためフィリピン大学大学院に入りました。春休み、ビザの取得のため日本に帰る前の空き時間を利用してポトランの地を訪ね、子どもたちと楽しく過ごしました。一九八三年四月二日、送別会の後、泳いでいる時でした。二人の子が溺れかけたので助けようとしたが、三人とも溺れてしまいます。何とか助け出されたものの、るつ記さんだけが息を吹き返しませんでした。二十才でした。るつ記さんの犠牲によって、大切な二人の子の命が救われました。

神様はイエス様の十字架の犠牲によって、私たちに永遠の命を与えようとしておられるのです。いざ歌え いざ祝え♪(教会学校せいいか30)



聖書 詩篇103・1～22 テーマ 恵みを覚えて

序論

(福井)

本詩はその題でダビデの作とされている、全詩篇でも最も美しい賛美の詩です。また、世界の多くの人々に知られている純粋な賛美の歌です。作者は神を畏れ敬う者への神の愛を告げています。

一、すべての恵みを心にとめよ

最初と最後に、「わがたましいよ、主をほめよ」と三度(1、2、22)繰り返されています。御霊に導かれた詩人が、全霊全生全身をつくして心の底より神を賛美するようにとの呼びかけです。私たちの魂は、主の恵みによって死から命に移されました。それで、「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美することができるのです。「わがうちなるすべてのもの」が、「聖なるみ名」を賛美できるのは、「そのすべてのめぐみを心にとめ」ることから生れます。新改訳では「心にとめよ」を「何一つ忘れるな」と訳されていて、「聖なるみ名」を賛美できるのは、「すべてのめぐみ」を思い起こすことから生れます。

「すべてのめぐみ」とは「主の良くしてくださいったこと」(新改訳)です。その核心は、主が今すでに、罪の赦しを与えてくださっていることだけでなく、将来的なすべての病のいやしのことでなく、(3)。これは、「あなたのいのちを墓からあがないいだし」た時、すなわち、私たちのからだの復活の時に、目に見える形で表されます(4)。すべ

ての恵みの主を賛美しつつ生きるなら、「若返って、わしのように新たになる」(5、イザヤ40・31)歩みとなるのです。

二、神の恵みとあわれみ

6節からはイスラエル民族の歴史を振り返り、神の恵みとあわれみについて詩っています。

神は「正義と公正とを行われる」お方です。そして、この「正義と公正」とは、「すべてしえたげられる者のために」行われます。具体的には、イスラエルを虐待するエジプトに対するさばきとして表されたのです(7)。

また、神は「めぐみふか」いお方です(出エジプト34・6～7)。「めぐみ」も「いつくしみ」も、ヘブル語の「ヘセッド」の訳です。神は、イスラエルを「愛し」(申命記7・7)、彼らと契約を結び、彼らに裏切られながらも自身の約束に真実であられるお方です。

さらに、「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」愛に富む父なる神です。「あわれみ」とは、真実な「父」がその「子」に対していだく感情です。イエスはその「あわれみ」を、放蕩息子(ほうとうむすこ)を待つ父の姿を通して話されました(ルカ15・22)。

私たちは神の恵みのために、しばしば神を賛美します。しかし、そのご性質のため賛美することはまれです。恵みを喜ぶよりも、恵みの主ご自身を喜ぶことが大切です。

三、主の語りかけを聴きつつ生きる

イスラエルの野に咲く花は、驚くほど美しいと同時に短命です(15)。人の一生も草のようにはなく、その栄えは野の花のように短いものです。しかし、愛なる神はそんな私たちの命を美しく輝かせることができます。その神の愛は永遠であり、過ぎ行くこの世のものではありません(17)。その対象者は、主の愛に満ちた契約を深く心で味わい、昼も夜も黙想し、心に留めて行う人です(18)。

最後に、19節から22節で、「主をほめまつれ」との賛美が繰り返されています。ただし、その勧めは、「わがたましい」から広げられ、主の使いたち、すべての万軍とすべての被造物にまで向かいます。その根拠は「主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごととすべての物を統べ治める」ことを確信しているからです。

この世界には様々な矛盾、不条理がありますが、それは神にある完全な平和を生み出すための産みの苦しみにすぎません。この世界は、神にとつて制御不能なのではなく、確実に完成に向かっているのです。主は、ご自身の「み言葉」によってこの世界を支配しておられます。その「み言葉」が私たちにも与えられています。それこそが、私たちを「すべてのめぐみ」に満ち足らせてくださる神の御手のわざの根本です。

結論

全身全霊で主をほめたたえる者の魂は、驚くように新たにされ、命の輝きが生まれます。私たちの心の底にある「渇き」を真の意味で満足させてくださる方は、愛とあわれみの主ご自身なのです。

研究資料

(井上)

バックストン師はこの詩篇に、「賛美すべき勧め」(詩篇の靈的思想)という表題を付けている。ダビデの作である。愛なる神を表す美しい詩篇として知られている。

テキスト

1 わがたましいよ、主をほめよ ほめよ(ハ)バーラク) 本篇には「主をほめよ」という勧めが五回記されている。神に賛美をささげる理由が説明されていく。わがうちなるすべてのものよ自分の持てるすべてのものをもって賛美すべきお方である。聖なる(ハ)コーデシュ) 語源の一つには「明るい」、「輝く」が示唆される。神の栄光、火が関連づけられる。もう一つは「分離」が考えられ、聖別との関わりが指摘される。神がきよいお方であることは、神の道徳的な性質の根本にある。み名(ハ)シェーム) 旧約聖書中では八百六十四回使用され、一般的な名という意味でも使われる。先週の「名」を参照されたい。

3~5 この3節の間に六つの恵みが記されている。①すべての不義をゆるし(3節) 不義(ハ)アウオン) 悪を行なうという意味で、意識的な悪を表す。刑罰とも訳され、償いが伴うことが解る。不義がゆるされる。②すべての病をいやし(3節) 神はあなたの肉体を造られ、あなたの魂を造られた。神は自らの造り成したものを、いかに再生するかをご存知である(アウグスチヌス)。③いのちを墓からあがないだし(4節) 墓(ハ)シャチャス) 本来、穴という意味であり新改訳はそのように訳出している。英訳聖書(KJV)は破壊と

訳したが、神は肉体の死、靈的な死からもあがない出される。④いつくしみと、あわれみ(4節) いつくしみ(ハ)ヘセッド) 語意は広く、「愛」

「あわれみ」、「恵み」なども訳される。契約関係での忠誠を示す意味があり、神の愛の契約に関わる。あわれみ(ハ)ラハミーム) 元々、親子、兄弟にあるような近親の情愛が原意にある。いつくしみと同様、契約の概念が含まれている。感情的なものではなく、正義と公平と共に表される。⑤あなたを飽き足らせられる(5節) 飽き足らせられる(ハ)サーバ) 願ひ、求めに応え、良きもので満たされる神である。⑥若返って、わしのようにならなる(5節) 猛禽類のわしは、体も大きく、力強く、高く飛翔することができ。体の小さな鳥よりも長命である。神からの命、力が、わしの生命力にたとえられている。神の恵みによって、新たな力をいただくことができる(イザヤ40・31)。

6 主は…正義と公正を行なわれる 5節までは作者ダビデの個人的な救いの体験、恵みの証が記されている。6節からは、イスラエル民族の恵みの証である。主はイスラエルの歴史を通して、正義と公正を表せられた。

7 主はおのれの道をモーセに知らせ モーセは神に進むべき道を尋ねた(出エジプト33・13)。モーセがシナイ山に登った留守中、偶像崇拜に陥った民を、神が見離そうとされた時であった。モーセの祈りに応えられて、神は民を見捨てられず、カナンへの道を示し続けられた。

8~9 主はあわれみに富み、めぐみ深く、怒ること遅く、いつくしみ豊か… 主は常に責める

ことをせず、また、とこしえに怒りをいだかない言葉どおりであり、何ら説明の必要がない。慈愛に富む神の性質は、イスラエルの全歴史を通して表された。

11 天が地よりも高いように 時代と文化が違う私たちには、過大な表現に思える。ダビデの言い回しには、他にも詩篇36・6、57・5などが挙げられる。ダビデの神を知る体験の深さ、培われた信仰の豊かさのゆえであろう。

12 東が西から遠いように 前述と同じように、非常に大きな表現である。神がなさることは、そこまで徹底されることが解る。

13 主はおのれを恐れる者をあわれまれる 13節からは歴史上のことではなく、現在の恵みが語られている。

15 よわいは草のごとく 草(ハ)ハシール) 青草、若草とも訳出。草は雨期には見られるが、やがて枯れる(ヤコブ1・11)。草は人の命のほかなさにたとえられる。その栄えは野の花にひとい花(ハ)ペラー) も雨期が終わると一斉に咲く。しかし、その後の日差しや熱風ですぐに散ってしまふ。人の世の栄華の空しさにたとえられている。

17 主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで いつくしみ(ハ)ヘセッド) 4節で述べたように、神は人との契約を守られる。約束の愛を表し続けるお方である。神の愛は永遠から永遠にいたるものであり、過ぎ行くこの世のものではない。神をほめよ、との賛美が繰り返される。

参考図書 Keil-Dilitzsch, Commentary on The Old Testament vol.15 (Erdmans) 他

聖書	詩篇103・1～22
タイトル	数えてみよう！ 神様の恵み
暗唱聖句	わがたましいよ、主をほめよ。 そのすべてのめぐみを心に よ。 詩篇103・2 一年の神の恵みを覚え、神に感 謝をささげる。
目 標	

導入

(松浦み)

今年最後の日曜日ですね。神様はたくさんのお恵みをくださいました。その一つ一つを数えて神様に感謝しましょう。

主をほめたたえよ

まず、主をほめたたえましょう。どんなふうにすればいいの？ 神様に感謝と賛美をささげる方法は、型にはまったものではありません。

①自分の持つすべてのものをもって、心の底から主をほめたたえよう。

ある人は歌をもつて、楽器を奏でたり吹いたりすることを通して、感謝をささげます。またある人はダンスを踊って主をほめたたえます。アートを通してもほめたたえることができますね。あなたの持つすべてのものを用いて感謝しましょう。

②主の治められるすべての所で、主をほめたたえよう。

もう宇宙は遠い存在ではありませんでしたね。皆さんの中から宇宙に飛び立つ人が出てくるかもしれません。そんな時、ロシアの宇宙飛行士のように「神はそこにいなかった」というのでなく、アメリカの宇宙飛行士アームストロングのように、「わた

しは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。人は何者なので、これを見心にとめられるのですか、人は何者なのでこれを顧みられるのですか」(詩篇8:3～4)、こんなふうに宇宙で主をほめたたえることができるなら何と素晴らしいでしょう。主が治められるすべての所とは、場所を選びません。あなたの家で、教会で、学校で、旅行先で、友だちと遊んだり、塾などで、どこでも主をほめたたえることはできますね。

すべてのめぐみを心にとめよう

他の聖書の訳では「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」と記されています。

①すべての罪がゆるされること：クリスマスにイエスが誕生してくださったのは、私たちの罪を赦し、永遠の命を与えるためと、学びましたね。罪赦されるほど素晴らしいことはありません。

②病が癒されること：イエス様は病を癒し、死人を生き返らせるお方です。今、難しい病気のお友だちや家族の人もいるかもしれませんね。イエス様は私自身の体を一番ご存知です。いやし、守ってくださいのお方であると信じましょう。

③命をあがなってくださいること：墓から贖うということは、死、滅び、行き詰まり、希望のない道から買い取って、引き戻してくださいという意味ですね。私たちの失敗も罪も、行き詰まりも、みんな解決されて、勝利を与えてくださるイエス様をほめたたえましょう。

④すべての必要を飽きるほど満たしてくださいのこと：何とすばらしい恵みでしょう。必要が満たされるだけでなく、一生、良きものを溢れるばかり

満たしてくださいのです。

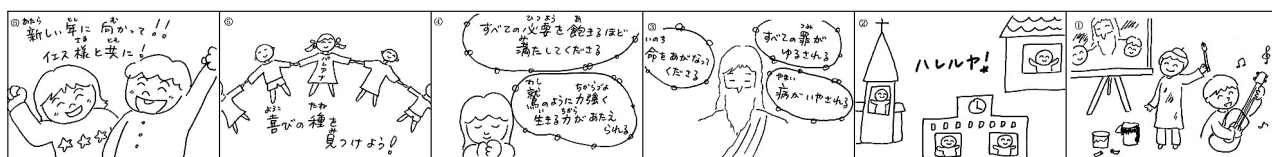
⑤驚のように力強く生きる力が与えられること：驚は、鳥の仲間のなかでは、体も大きく、力強く高く飛べるし、他の鳥よりも長命です。私たちに神様の力が注がれる時、新しい力を得て生きることができのです。この一年を振り返って神様の恵みを一つひとつ心にとめ、感謝して一年を締めくくりましょう。

ある少女のお話(ポーター作「少女パレアナ」)

パレアナという女の子は、お父さんの勧めで「喜びの遊び」を始めました。どんな時にも喜ぶことを見つける遊びです。ある時、お人形を欲しがっていたパレアナの所に松葉杖が届きました。がっかりするパレアナに、お父さんは「松葉杖を使わなくても歩けるからうれしいね」といって、喜びの種をみつけてくれました。その時からどんなに悲しい時も、喜びの種を、感謝することを見つけることを始めました。しかし、私たちの毎日は願いどおりにはならないことが起こります。でもパレアナは、不平を言ったり、不満を言ったりしないで、どんな時でも喜ぶことを見つけて、周りの人々に喜びと感謝の輪を広げていったのです。

一年の終わりに私たちも感謝の種、喜びの種を数えて、主をほめたたえましょう。中でもイエス様を心にお迎えし、永遠の命を手にし、受洗の恵みにあずかったお友だちは、大いに感謝をささげ、主を証しするものとなりますよう。一年のよき締めくくりと共に、新しい年に向かってイエス様と共に、さあ、レッツゴー！

♪わたしのようにないな子♪ (聖歌 656)



牧羊ひろば

峰山教会・教会学校

◆峰山教会学校の環境

峰山教会は、京都府最北端の丹後半島にある京丹後市の市庁舎前に建っています。丹後半島には古墳が五千もあり、千五百年前には丹後王国が存在していたと言われている古代の町で、今も檀家制度で生きている典型的な地方です。昔から絹織物が主産業の農漁村中心の町でしたが、『丹後ちりめん』が衰退後、それに変わる産業が育たず、経済不況のあおりを受け、倒産が相次ぎ、日本一自殺者の多い町と言われ、市内に限界集落が三十五を数える過疎化の進む現状です。

峰山教会は八十四年の歴史を持っています。ちりめん産業が盛んであった三十年前には、教会学校には百人ほどの生徒が集い、教会活動の中心が教会学校に置かれていました。この教会学校活動の中から、今も教団の内外で活躍中の献身者が、何人も起こされています。その中の一人、谷垣雄三医師は、現在アフリカのニジェールでシユバイツアーの様な医療活動をしてられます。彼は、中高生の時、峰山教会学校の生徒の一人でした。



谷垣雄三医師 峰山を訪ねて
先年帰国の折、教会をお訪ねくださり、「良きサマリヤ人の話を聞いて、私は医者になりアフリカに命を捧げる

事になりました」と、お証しくされました。当時の高校の同窓生たちが、支援会を組織して谷垣医師を支援しています。その多くが教会学校の同窓生でもあります。これも教会学校活動に対する、神様の祝福の一つだと信じています。

◆峰山教会における教会学校の位置

この牧羊ひろばを書くにあたり、現在の教会における教会学校の結実を整理してみました。六月の礼拝出席名簿にある方々のうち、クリスチヤン一代目の人が二十九人。二代目が二十九人、三代目が十人。教会学校の生徒では、四代目が六人、三代目が十七人、二代目が四人、教会員以外の子ども三人でした。



幼児祝福式

毎週の礼拝出席者のうち、二代目以上の人が多いという事をあらためて確認できました。これは、教会員が子どもたちを教会学校に導き、信仰の継承に努めてきた結果だと言えるでしょう。実は、この事実は私



献児式

就職するのです。

教会の青年のほとんどが、教会学校教師として訓練され長年奉仕に携わってきたのですが、その結実のほとんどを都市部の教会に託する事になってきました。このために、教会学校活動の大切さを自覚しながらも、正直なところ、同時に虚しさも伴って来ます。地方教会として、教会の宣教方針の中心をどこに置いたらいいのだろうか、祈らせられる課題でした。

先日の特伝の時に用いたアンデレカード（求道者カード）には、百五十人ほど登録されています。この名簿の中で、かつてのCS関係者は、三分の一を占めておりました。またキリスト信者の中で、子どもたちに教会学校との何らかの触れ合いを経験している人は、半分以上あるように思います。この峰山においては、教会を訪ねてくる人たちのほとんどが、現在の教会員による紹介か、かつての教会学校体験者なのです。三十年、四十年前の教会学校の体験が、今の教会活動を支えている事が分かりました。

にとっても大きな驚きでした。と言うのは、丹後には、高校より上の教育機関が一つありません。また、この地域には就職できるような産業が無いため、ほとんどの子どもは、高校を卒業するとこの地域を離れ、都市部の学校に進学するか、



進級式

◆現在の教会学校活動

現在の在籍数は小学生以下が二十八人です。毎週の出席数を平均すると八人ほどです。そのほとんどが信徒の家族です。五年前までは、一般礼拝と並行して教会学校をしてきましたが、

新会堂に移ってから、大人と一緒に礼拝をし、説教の時間を分級にして、小学生以下の子どもたちは、別の部屋で「牧羊者」をテキストに教会学校をするように致しました。教会員子弟は、親子揃って教会に来るため、以前のように一般礼拝前に教会学校をする事が出来ません。大人の礼拝と並行すると、牧師による祝福を子どもたちが受けられない事になります。教会学校の卒業生で、大人の礼拝に残る生徒は親と一緒に一般礼拝に出席している生徒が、圧倒的に多い過去の経験から、親子揃って礼拝をささげる形に切り替えたのです。

◆見えてきた課題

現在、教会学校教師は五～七人が担当しています。それは、母親の手を離せない乳幼児の場合、母親も教会学校に同席する事が多いからです。このことから、母親の魂の課題が出て来ました。教会学校教師のために、第一部礼拝を用意しています。が、出席不可能な教師もあります。また、牧師が教会学校の現場を見ていないため、教師や教会学校

に対する適切な指導ができない状況があるのです。もう一つの大きな課題は、積極的な伝道が出来ていない事です。毎週の活動は、基本的に現状に即した対応に起因した方法なので、現状維持意識が根底に横たわっています。また、教会の周辺地域は高齢者家庭がほとんどです。子どもがいる住宅地区から、子どもを教会に連れて来るには、毎

週自動車による送迎が必要になります。ですから、個人の自由な生活時間を保てなくなり、生徒の親御さんから敬遠されるケースが度々起こるのです。

◆課題に対する対策

子どもの特別集会を年三回開いて、教会学校生徒たちの周辺にいる親しくしている子どもたちを教会に誘っています。

①進級式前後に「餅つき大会」を開催

この日は、教会学校と合同礼拝にして、賛美や交誦なども、子ども讃美歌の中から選び、礼拝メッセージも、フラインググラフを制作して、大人も子どもも楽しめるものにします。午後、餅つきをして、



もちつき大会



もちつき大会（合同礼拝）

◆課題に対する対策

子どもの特別集会を年三回開いて、教会学校生徒たちの周辺にいる親しくしている子どもたちを教会に誘っています。

①進級式前後に「餅つき大会」を開催

この日は、教会学校と合同礼拝にして、賛美や交誦なども、子ども讃美歌の中から選び、礼拝メッセージも、フラインググラフを制作して、大人も子どもも楽しめるものにします。午後、餅つきをして、

高齢者の方々に餅の扱い方を指導してもらいながら、出席者全員で楽しめます。

②夏休みに、ファミリー・キャンプを実施

生徒たちの母親は教会員である場合が多いのですが、そのぶん父親が取り残されている感があります。家族で教会に泊まり、

ファミリーキャンプ
壮年会の登場



ファミリーキャンプ
お父さんの登場 水辺の遊び



ファミリーキャンプ
朝食



父親が生活奉仕の中心になつてもらって、家庭づくりを期待しながら、土・日の一泊キャンプを致します。土曜日は、壮年会担当で会場の設営から、夕食の準備にあたつてもらいます。その間に、子どもたちは、夏休みの宿題に役立つような、工作をします。どんぐりと小枝を使って、人形作りをしたこともあります。生徒の中に、「折り紙博士」がいますので、彼に指導者になつてもらい、創作折り紙と舞台を作ったこともあります。聖日は、婦人会の担当で、宿泊者の朝食、生徒たちの生活指導をしてもらいます。そして礼拝は合同礼拝です。昼食は、出席者全員でおにぎり定食を頂きながら、楽しいひと時を教

会全体で持ちます。

③こどもクリスマスを開催

①②に誘った子どもたちを中心に広く招待し、学校が休みの土曜日に開いています。朝十時に始まり、先ずクリスマス・カロールを数曲教え、初めてきた子どもでも一緒に礼拝に臨めるようにします。紙芝居や人形劇、フランネル・グラフなどを用いて、聖書のクリスマス物語を中心に福音を伝えます。昼食後に、工作やゲームなど楽しい時を持ちます。昨年は、一人一人にスポンジケーキを渡し、生クリームや飾りになるお菓子を用意して、デコレーションケーキ作りをしました。「家に帰ってお母さんと一緒に、クリスマスケーキを作れたら良いね」と勧め、子どもたちの家事参加を促します。

何年も続けるうちに、毎回集う子どもたちも増えて、三十人を越える子どもたちが集います。最近では、保護者の何人もが同行してくれるようになりました。

◆その他の日常的対策

峰山教会は、どの地方教会も抱えているように、出席者の大半が年配者です。そこで、一番の課題を後継者の育成に置いていました。若い人たちがなかなか導けないことに悩みを強くもっていたからです。私は、「この町にはあなたと同じような年配者が大勢いるのだから、自分が日ごろ親しくしている、自分と同じ世代の友人を誘いましよ」と、勧めました。そして、「私の働きは、その方のお孫さんが教会に来られるようにする事です」と宣言しました。普段から親しんでいる同年輩の友人ならば、地区集会や特伝にも誘えると、アンデ

レカードの名簿も増え、誘われて集会に来てくださる方も与えられるようになりました。八年目を迎えた現在、礼拝に子どもや孫を連れてくる方が、十家族を数えるようになりました。

来られた子ども（嬰兒）たちと、礼拝後一人一人目を合わせて、一人の人間として対話します。彼の興味を持つている物に注目し、関心を寄せ質問します。時には、宿題を出します。「○○ちゃん、その花の名前、先生に教えてくれない？家に植物図鑑があつたけど、あれを見ると、何種類もあるはずなんだ」。次の週、彼に会った時、必ず宿題の答えを尋ねます。自分から言い出す子は少ないですが、子どもは必ず調べてきます。一人一人の将来を広げる可能性のある、対話を重ねるのです。だれでも自分を認めて、自分に期待を寄せてくれる人を求めていますので、良い関係を結ぶことができるのです。そのうちに、子どもが親を促して教会に来るようになるのです。この関係づくりがうまくいくと、間違つたことをした時に、厳しく叱つても素直に従うようになります。現在、オンラインピックを目指す者、学者、実業家、芸術家、料理人、音楽家に挑戦しつつある青年たちが、各地に出て行っています。子どもの頃の神様との出会いを通して、今は直接教会とはつながっていないくとも、彼らの心は、神に捉えられているのです。教会学校としての形は、現在、整えられているとは言えません。現状に即した一つの対策です。それは、教会学校という形にとらわれず、生徒たち一人一人の魂とその生涯を神との関わりで打ち立てることであり、神様との出会いの場を提供する働きである、と受け取つたら良いと思っています。（水川武志）

「おわりに」

『牧羊者』二〇一〇年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には、新しい年度が始まったあわただしい中を、また、夏の諸準備のあるこの時期に貴重な時間を割いて執筆していただき、心から感謝いたします。今回は、「牧羊者使用状況アンケートの集計」の後半（その2）と、「牧羊者の用い方：メッセージの準備のために」の前半（その1）を掲載しました。また、「牧羊ひろば」では、峰山教会の八十四年間の歩みと現在の課題を紹介していただきました。終わりに今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解

研究資料

メッセージ例

ワーク(A)

ワーク(B)

ワーク(C)

ワーク(D)

中高科へのヒント

子ども聖書日課

フラッシュカード

イラスト

ワークB打ち込み

校正

また、陰で労してくださった各師と兄弟姉妹、ワーク印刷と発送のベラカ出版、印刷のあくもと菱三印刷に心から感謝いたします。（長尾秀紀）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一〇年度 Ⅲ巻

二〇一〇年十月一日発行

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三三一九

電話(〇七八)五七五五一一

FAX(〇七八)五七五五一一

印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六一三九六一

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み